



心の歌を奏で て

—仮面の国—
①中の①

芳田尚哉

道場に入ると、俺の他にはこの蛙っぽい仮面の人しかいない。

ちなみにこの人はミカツチという名前のようだ。

お互い名乗っていないが、仮面に`MIKADUCHI、と彫られているので名前はわかる。

「……………」

「……………」

なんだか、空気が重い。

俺たちは、ずっと正座をしたまま、向かい合って座っている。

これって、なにかの面接なんだろうか。これで、なにかを見極められてるんだろうか。

……………違うよな。

どうも、そういう感じはしない。

ミカツチさんの視線が定まっていない。真っ直ぐ前を見ているようでその実、どこか遠い場所を見ているような感じだ。もっとも、仮面のせいで正確にはわからないんだけど。

「……………」

声を掛けるべきだろうか。

この空気を破るのが難しい。

ええい、ままよ。

「あの……」

思い切って声を出してみるものの、ミカツチさんの反応はない。

「あの……ミカツチさん？」

どうしたんだろう？

動じないっていうよりも……………。

「固まってる？」

まるで時間が止まったようだ。

「ミカツチさん？ あの……ミカツチさん」

繰り返し声を掛ける。

こりゃ、気付いてもらえらるまで声を掛けないといけないのか。

そうこうして、声を掛け続けると、ようやく時間が動き出した。

「はっ、わたし……。すみません。なんででしょうか」

急に動き出したので驚かすにはいられなかった。

「ミカツチさん、あのですね……」

ごくんと唾を飲み込む。

「は、はい」

ミカツチさんは、かなり緊張しているようだ。俺も緊張してるからな……。二人して緊張してるのってどうなんだろうな。

「あの……この道場って、他には誰かいないんですか？」

ずっと気になってたんだ。

この道場でミカツチさん以外の姿を見ていない。

立派な広い道場に、ミカツチさんと俺しかいないんだ。

別に、こういうのはじいさんに鍛えられていた頃もあったからいいんだけどな。

「は、はい。ここはわたしだけです」

「そうなんですか」

どうやら、本当にこの人だけのようだ。

「でも、教えてくれるんですよね」

「は、はい。もちろんです」

この人は、どうしてこんなに緊張してるんだらう？

「今までってどうしてたんですか？」

「……………誰もいませんでした。あなたが初めてなんです」

「……………」

なるほど。俺が最初の生徒ってわけか。

確かに案内所でも、剣術なんかをする人はいないって言ってたよな。それなのに、こういう道場を開こうとするなんて……。

「今まで誰も来てくれなくて、もう辞めた方がいいかもって思ってたんですけど、それでも自分を鍛えるために続けていたんです」

「そうだったんですか」

「はい。それで、剣術を学びたいという事ですけど……その……経験はあるんですか？」

「はい、少しだけ。基本は教えてもらって、少し我流だったりします」

「そうですか……。基本ができていたようでしたら、早速腕前を確かめさせていただきますか」

そう言うと、すっと立ち上がる。その姿はとても流麗だった。

「こちらをお使い下さい」

そう言って渡されたのは木刀だ。

やっぱり軽いな。

ずっと風伯を使っていたので、木刀や竹刀が軽く感じてしまう。そりゃ、真剣と比べるとな。

「あれ？ これ……」

渡された木刀を握ると不思議な感じがした。

すっと手に馴染む。まるで、木刀の方から吸いついてくるような感じだ。

「さすがに経験者ですね」

今までの緊張はどこへやら、ミカツチさんは落ち着いた様子でこっちを見ている。

今までとは纏う空気が変わったな。

「この木刀、どうしてこんなに……」

「時間がありますので、普段から木刀を作っているんです。それぞれ、少しずつ変化をつけていまして、その人に合ったものを選んでるんですよ」

「これを……ミカツチさんが？」

「はい」

よく見ると、壁には大量の木刀がある。これ全部、少しずつ違うっていうのか。

っていうか、これだけの数を作ったってのはすごいで。

もうどのくらいあるのか数えられない。店が開けるぞ。

「すごいですね……」

「恐れ入ります。それでは、早速手合わせいただけますか」

そうだった。俺の腕前を確かめるんだったな。

「わかりました」

立ち上がり、木刀を構える。

「綺麗な立ち姿ですね。かなりの腕前なのではないですか？　もしかすると、わたしが教える事などなさそうですね」

そう言って構える姿は、じいさんのそれよりも様になっている。こんな相手に勝てる気がしない。

「そんな事ありませんよ。俺なんて未熟もいいとこだと思います」

そう言いながら、木刀を中段に構える。気迫だけで、完全に負けている。

この人は、本当にすごいかもしれない。こんな人と手合わせできるなんて、かなりラッキーなんじゃないか。しかも、教わる事もできそうだし。もっとも、それは俺の実力次第かな。

とにかく、今は全力で向かっていくか。

「ありがとうございました」

膝をついて、そして横に倒れる。

完敗だった。

完全に打ち負けた。

「なかなかの腕前ですね」

そう言うミカツチさんは、息を乱していないし、汗もかいていない。

それに引き替え、俺は息も絶え絶えだし、汗が止まらない。

俺だって少しは鍛えてきたつもりだ。さすがに初心者じゃない。

だけどこれじゃ、初心者同然だ。

「ここまで長い間打ち合えた人は、あまりいませんよ」

その言葉で少しは慰められるかも。

じいさんに鍛えてもらってなかったら、一瞬で勝負は決しているだろうな。

「あの……俺に剣を教えて下さい」

そう言うと、ミカツチさんは首を傾げる。

「は、はい。もとよりそのつもりですし、ファイさんもそのつもりですよ」

「……………はい」

「でしたら、わたしなんかでよければ」

「お願いします。こんな程度じゃ、護りたい人や護りたいものを護る事ができないんです」

「充分な腕前だと思いますよ」

「でも、ミカツチさんには、手も足も出なかった」

「そうかもしれませんが、正直なところ、あたしとあれほど打ち合えた相手は、久しぶりですから。今まで強豪の剣士と名乗る人たちは、一撃で終わっていましたよ」

俺を慰めるための言葉……って事もなさそうだな。この人は、そういう上辺だけの事は言いそうにない。剣を交えれば、その人の事がよくわかる。だから言い切れる。この人は、裏表のない人なんだ。

それにしても、こんなレベルの人がいるなんて……。じいさんだって、それなりの使い手だ。あの歳でも、現役世代と対等以上だ。それでも、ミカツチさんの前では素人同然だろう。この人は、本当にすごい。

だけど、ミカツチさん以上の実力の人がいるんだろうな。少なくとも対等に剣を交える事ができる人はいるだろう。

世界って本当に広い。

俺たちの世界だけなら、きっとミカツチさん以上の人はいないだろう。だけど、世界は無数にある。そのどこかには、ミカツチさんですら簡単に倒せてしまう人がいるんだろう。

そう考えると、俺なんて未熟なんてもんじゃないな。

「ありがとうございます。それでも、俺はミカツチさんに負けないように……せめてもっと近付きたい」

「わかりました。基礎は充分できています。しかし、やはり基礎が大切です」

「はい」

じいさんも同じ事を言っていた気がする。

毎日の素振りは欠かせなかったし、基礎トレーニングも同じだ。

村をどれだけ走らされた事か。

でも、そのお蔭でミカツチさんとここまでできたんだ。

それに、ヒナゲシさんにも教えてもらったよな。

それでも、ミカツチさんには手も足も出ない。

「まだ息が整っていないようですので、先程の流れを頭の中で思い出して、イメージの中で剣を交えてみて下さい」

「はい、わかりました」

イメージトレーニングか。

まあ、内容を組み立てて、どう処理するかを考えるのは重要だ。

それにしても、さっきのか……。

正直、受け流すのに精一杯だったからな……。

それでも、目を閉じて思い返してみる。

中段に構えていたが、ミカツチさんが右に動いたので、それを追って視線を移動させると、既に目の前に相手の木刀があった。

それは反射的にかわす事ができたが、そのまま俺の方に横薙にきて、完全に体勢を崩されてしまった。

それでも、なんとか距離をとって、体勢を立て直そうとする。

ミカツチさんはそれを確認して、そうさせまいとするので、さらに距離をとる。

それでなんとか体勢を整える事ができて、ようやく攻撃をしようとするが、やはりミカツチさんの攻撃が目の前に迫っている。

それをなんとか木刀で受け流す。

それが意外だったのか、ミカツチさんは一端距離をとった。

これがチャンスだと思い、思い切って一步前に踏み込む。

それがなんとか成功して、ミカツチさんを一步下がる事ができた。

だけど、それが限界だった。

それで俺の実力を見極めたのか、ミカツチさんは真っ直ぐに攻撃してきた。

そこから、ひたすら木刀で攻撃を受ける。

避ける事もできずに、ただ打たれ続けていた。

このままかと思ったけど、ミカツチさんは攻撃の手を止める。

それを感じて、俺はひたすら打ち続けた。

ミカツチさんは、難なくそれを受けている。ただ受けているというだけでなく、合間合間に攻撃もしてくる。

そうされると、俺は防御に徹するしかなくなる。

そんな打ち合いを続けていると、体力が続かなくなってきた。

次第に攻撃が弱まってしまう。

もちろん、ミカツチさんはそれを見逃さなかった。

ここまでだと言わんばかりに、今までにない鋭い一撃を突きつけられた。受け流す事ができない。全ての力をまともに受けてよろけてしまう。踏みとどまる事ができなかった。

その次の瞬間、ミカツチさんの木刀が、俺の眼前にあった。

完全に負けた。

内容としても、俺が試され続けただけだ。

一步下がらせた一撃以外は、完全に相手のペースだった。まさに思惑通りに打たされていただけだ。

「ふう～」

思い返してみても、対抗する事ができない。

俺の技術じゃとても無理だ。

それに、基礎体力も全然だ。

もっと鍛える必要があるそうだな。

これだけ力の差を見せつけられると、絶望すらない。

だけど、ミカツチさんくらいにならないとな。

そのためには、どれだけ時間が必要なんだろうな。

マンガであるみたいに、少しの時間で数年分の修行ができたりすればいいのにな。そんなのはあるはずないんだけど。

「お願いします」

息も整い、準備はできた。

「そうですね。それでは、まずあなたが普段使っている剣を見せてくれますか」

「普段使っている剣……ですか」

「はい。どのようなものを使っているのかが重要ですから」

「わかりました」

俺は風伯をミカツチさんに渡す。

「えっ、なに、これ……」

受け取ったミカツチさんは、その重さに驚いていた。もっとも、真剣としてはそれほど重くない。だが、この風伯は見た目は木刀なのだ。木刀と思って持つと、こうなってしまう。

「すみません。それは木刀じゃなくて真剣なんです」

「真剣……。なるほど。それなら納得ですね。しかし、どう見ても木刀ですね……」

ミカツチさんは、風伯を隅々まで見ている。

「真剣という事は、抜く事ができるわけですよね。ですが、どうもそういう感じはないのですが……」

ああ、そうだった。

「それは、俺にしか抜けないんです」

「ファイさんにしか抜けない？ どういう事ですか？」

俺だって説明はできないよな。そういうものだって事くらいしか。

「それはちょっと変わった刀なんです。刀が認めた所有者しか抜く事ができないんです」

「……不思議ですね。ちょっと抜いてもらえますか」

そう言って返された風伯を抜く。

「ふあああっ」

鞘から抜かれた風伯を見て、ミカツチさんは口元を手で覆いながら、キラキラした目をしている。

「綺麗ですね……。こんな美しい刀身をしているなんて……。本当に綺麗」

どうやら、風伯の刀身に見とれているようだ。

俺には刀の美しさまではわからない。まあ、風伯は洗練されている感じはする。透き通るような美しさや鋭さがある。

今まで考えた事もなかったけど、そういう視点で見れば、確かに風伯はとても美しい刀なんだと思う。

「ですが、ファイさんには、あまり向いていないかもしれませんね」

「えっ？」

思わぬ言葉だった。

「俺に向いていない？ どういう事ですか」

まさか、難癖をつけて、風伯を俺から取り上げようって事か？いやいや、そんな事はない。ミカツチさんは、そういう人じゃない。

「先程打ち合って感じたのですが、ファイさんの場合、重い一撃が効果的だと思うんです」

「重い一撃.....」

「そうです。この刀の場合、速さと斬れ味は問題ないと思います。ですが、ファイさんの本来の剣は、もっと重い一撃を放てるものだと思うんです」

「それって、どういう.....」

「そうですね.....もっと刀身の厚い、単純に大きなものでもいいかもしれませんね。速度を殺してでも、一撃の重さを生かすべきだと思います。もちろん、ファイさんが今のままで闘うというならば、わたしはその術を教えます」

「.....」

俺のスタイルか。

確かに今までは剣道にしる剣術にしる、相手より速く打ち込む事を考えていた。

それに、風伯の性質上、それを求めているのがわかったから、そうしようと思ってきた。

だけど、よく考えれば、じいさんからはそういう修行はあまりされなかった気がする。

風伯を使えと言われてからは、速さを中心にしていたけど、それ以前はそうじゃなかった。

剣道にしたって、ひたすら受けてチャンスを待て。そして、一撃で決めろと言われていた。それを今思い出した。

「一撃に全てを.....」

だけど、そのスタイルにするにも、俺が持っている刀は風伯のみだ。風伯でその闘い方はできない。風伯の場合は、やはり速さ重視になる。この刀身で重い一撃は難しい。

風伯のまま闘うわけだから、やはり速さ重視にするべきだろう。

ミカツチさんが言うように、俺には重い一撃の方が向いているとしても、それは違う刀にしなければならないという事だ。それはできない。

俺に合わせて刀を変える事はできない。俺は風伯と一緒に闘うと決めたんだ。

だから、俺が風伯に合わせればいい。俺が速さを身につければいいだけの事。

「ミカツチさん、俺は今のまま、この風伯と一緒に闘っていきたいです」

「そうですか。わかりました。それでは、そうしましょう」

「お願いします」

「そろそろ休憩にしましょうか」

ミカツチさんの声で我に返る。

ほぼ無心で素振りを続けていた。

「はい」

もうそんな時間か.....。

そもそも時計がないので、時間がわからないんだけど。

でも、そういえば腹が減ったかも。ずっと素振りをしていたって事もあるかもしれないな。

って、昼の準備をなにもしてない。

「ファイさんは、お昼はなにか持参されていますか？」

「あ、その……すっかり忘れていました」

「そうですか。それでは、わたしと一緒に食べましょうか。すぐになにか作りますね」

「でも……面倒じゃないですか？ なんだったら、俺はどこかで調達してきますし」

「いいえ、どうせ自分の分を作るつもりなので、手間ではないですよ」

「そうですか。じゃあ、お願いしても……。手伝える事があれば手伝いますし」

「いいえ、大丈夫ですよ。少しだけ待っていて下さいね」

「……はい」

なんだか予想外の展開だな。

確かに昼飯に関しては、すっかり忘れていたな。キヨカは……まあ、あいつの事だから、どこかで食べてるよな。近くには、飲食店もあったし。

ミカヅチさんが昼食を作ってくれている間、なにもしないわけにもいかない。かといって、なにか手伝えそうな事もない。

「やっぱ、もうちょっとなにかしてようかな」

思いつくのは素振りだけだ。

もう少しの間、素振りを続けよう。

「お待たせしました」

素振りを続けていると声を掛けられる。

「ずっと続けていたんですね」

「なにもしないわけにもいかないですし、少しでも早く上達したいので」

「そうですか。ですが、無理をしては意味がありません。ただ回数をこなせばいいというものでもないんです。適正な回数というものがあります。ですので、これからはわたしが指示した以外の事はしないで下さい」

「えっ……」

それって、自主トレ禁止って事か？

「隠れてしてもダメですよ。ファイさんに最適な回数を教えます。それ以上すると、上達が遅くなると思って下さい。実際、遅くなります」

「……………」

マジ？

どうも脅しってわけでもなさそうだ。

「……………わかりました」

ここはミカヅチさんに従っておこう。これだけの腕前の人だ。きちんとその指導には従わないと。

それにしても、自主トレ禁止令が出るなんて。

じいさんの修行にしる、学校の部活にしる、やっぱりどれだけ自主トレをしたかで成果が変わる。やっぱり、自主トレをしていたヤツほど、試合でいい結果を残していた。

そのせいもあって、自主トレ至上主義だったんだけどな……。

だけど、今はミカツチさんに師事している。なので、ミカツチさんの指示には従わないといけない。

「おそらく、今まではどれだけ自分で回数をこなすかを重視されていたと思いますが、わたしはそれを推奨はできません。それである程度は上達するかもしれませんが、ですが、それで得られる成果はあまりありません。むしろ、回数だけに拘り、無理をして体をこわしてしまうでしょう」

確かにそういう面もある。自主トレ中に怪我をしたり、体調を崩す事もある。だけど、それも自分がまだまだだという事だと思っていた。

「ファイさんは、わたしのようになりたいと仰いましたよね」

「はい」

「そうですか。でしたら、わたしが今まで積み重ねてきたものを全て伝えましょう」

ミカツチさんの全て……。

「……さあ、続きはお昼を食べてからにしましょう」

「そうですね」

そうして、ミカツチさんが用意してくれた昼食を、二人で食べた。

休憩を挟み、素振りを続けて日が暮れた。

本当にミカツチさんの特訓はハードだった。じいさんのしごき以上なんてないと思ってたけど、これはすごいぞ。

でも、ただ厳しいだけじゃなく、一日だけにも関わらず、成長したというか、強くなった気になった。実際は、そんなに変わってないんだろうけど。

それでも、こんな気分になるってのはすごいよな。

でも……明日は筋肉痛だな。

「本日はいかがでしたか？」

ミカツチさんは余裕っぽい。この人の領域までは、まだまだ遠いみたいだ。

「ありがとうございます。今日だけでも、かなり強くなった気がします」

「そうですか。そう感じていただけたのであれば、わたしとしても本望です」

「いえ、俺の師匠よりもいい感じですよ」

「恐縮です」

「できれば、明日もお願いします」

「こちらこそ、ファイさん程のお相手と修行させていただければ、わたしの剣技も向上致しますので」

「そう言っていただけて光栄です。俺はもっともっと強くなって、どうしても倒さないといけないものがあるんです」

「……倒すべきもの、ですか」

「はい。今のままじゃ、俺はそいつに太刀打ちできないんです。だから強くなりたいんです」

暑苦しいかな。ちょっと熱血すぎたかな。でも、その熱意は本物だ。

「そうですか。わたしも、どうしても滅したいものがあり、独りで修行を続けて参りました。ですが、わたしの力ではまだまだです」

「そうなんですか。ミカツチさんでも敵わない相手って気になりますけど、俺でよければ修行の相手をさせてもらいます。それに相応しいかはわかりませんが」

「いえ、ファイさんがお相手をして下さるなら、今までにない高みにまで踏み込めるでしょう」

「そんな、俺なんて……」

俺なんて、そこまで言ってもらえるレベルじゃない。ミカツチさんに比べたら、素人レベルだもんな。

「そんな事はありませんよ。ファイさんの師匠は素晴らしいお方なのでしょう。並の相手でしたら、問題なく勝てるでしょう。ですが、ファイさんが目指すところは、そこではないのですよね」

「はい。相手は強大すぎて、人並みじゃとてもとても……」

「わたしも同じ様なものです。ファイさん、これから共に精進致しましょう」

「はい」

明日の約束をして、俺は道場を後にした。

そういや、キヨカの方はどうなってんのかな。今日中に完売させるとか言ってたけど、本当に大丈夫なのか？ ちょっくら様子を見に行くか。

というわけで、店に向かうと……。

「閉まってる」

店やってねえのかよ。

完売で閉店したのか、単に閉めたのかわからない。

「っていうか、あれを完売とかって、普通はないよな」

でも、キヨカならなにかやっつけてしまいそうな気もするんだよな……。どっちなのか、とにかくキヨカを探さないとな。

「ったく……どこ行ったんだよ」

店にいないって、どこにいるんだ？ もしかして、部屋に戻ったのか？

とにかく、一度部屋に戻ってみるか。

「……………って、いねえし」

部屋に戻って見たものの、誰もいなかった。

「どこ行ったんだよ」

探すとなると骨だぞ。

可能性としては――

実はあの周辺にいた。

どこかの店で食ってる。

道場に行って行き違い。

さてどれだ。

可能性が高いのは、二番目だよな。

他の可能性は……なさそうだ。

「しょうがない。もう一度探すか」

というわけで、店に戻ってくると、

「ファイ……」

そこにはキヨカがいた。

「どこにいたんだよ。さっき来たら無人だったぞ」

「ごめん。ちょっと……」

「ん？」

なんだかキヨカの様子がおかしい。こいつがまもとってのはどうかと思うのだが、そういうんじゃない。落ち込んでる？

「どうしたんだ、シータ。お前らしくないぞ」

「私らしくってなんだよ。まあ、元気で可愛いシータちゃんなんだろうけど」

自分で言うか。

「……まあ、わかってるならいいんだけどな」

「ほへ？ ファイ、特訓のしすぎで頭が沸いた？」

なんて言い種だ。

「あのなあ。たまに肯定したらそれかよ。……まあ、どうでもいいんだけど。それにしてもどうしたよ。もしかして、完売できなかったのがショックなのか？」

「うっ……………」

キヨカは胸を押さえて蹲(うづくま)る。

「ファイ、言っている事と悪い事があるんだよ。知ってるかな？ シータちゃんのハートはとっても繊細なガラス細工なんだよ」

「……………」

こいつ、なにを言ってるんだ。

っていうか、そんな風に言えるなら、大丈夫なんじゃないか？ 心配するだけ無駄じゃないのか？

「おいっ、なにか反応してよ」

「いや、悪い。とにかく、なにがあったかは知らないけどさ、腹減ったから飯にしようぜ」

いい事なら食べている時に話すだろう。イヤな事なら、美味しいものを食べて忘れればいい。

「どこか美味しそうな店がないか、シータの直感を頼むよ」

キヨカの手を取り、立ち上がらせる。

「……わかったよ。美味しそうなお店ね……。どこかあるかな……。どこがいいかな……」

楽しそうに考えているその姿は、いつものキヨカだ。

少しは気晴らしになればいいんだけど。

キヨカが選んだ店で食事をして部屋に戻ってから、キヨカは今日の事を話し始めた。

「っていうか、スパイス完売ってどうなんだ、それ。予約販売かもしれないけどさ、あの数を一気に……って、マジなんだよな」

「嘘じゃないよ。本当だもん。……スパイスはそうだけど、保存食は全然だったよ」

「そっか……」

まあ、スパイスの方は、料理店なら欲しいと思う店もあるだろう。でもって、店なら一気に買うだろうとは簡単に想像できる。

キヨカが個人向けでなく、店舗向けに営業したのは正解だ。個人で買うなんて、まずないだろう。

だが、問題は保存食だ。

日持ちするわけだから、あの列車の旅にはうってつけ。

だから、キヨカの考えは正しい。あの駅でなら売れるはずだ。少なくとも、あの店にいるよりは。

だが、誤算としては、列車の本数は数日毎で、基本的に人がいないという事だ。

だけど、人がいれば売れるはずなんだ。

「まあ、一気に完売はしなかったけどさ、列車が走る日だったら売れるだろ」

「そうかもしれないけど……。今日中に全部売り切るって言ったのにさ……」

「なに言ってんだよ。充分すごいだろ」

キヨカの販売戦略は間違っていないと思う。時機の問題だけだと思う。

もちろん、俺も素人だから、プロが売り込めば今日中に完売もあったかもしれない。でも、素人がここまで考えてしたんだ。十分な成果だと思う。

「まあ、ファイがそう言ってくれるのは嬉しいんだけど、やっぱり私は宣言通りに売り切りたかったよ」

キヨカの意地なのかな。有言実行としたかったんだろう。

「次の列車の運行はいつなんだ？」

「えっと……………確か三日後だね」

三日後か……。出発がその日なら、その前日くらいから売り込めるかもしれないな。

「とにかく、その日に保存食を売り切れればいいんじゃないか？ それでいいだろ？」

「……………うん。そうだね。その日に売ってみせるよ」

「ああ」

なんだか、すっきりしないって感じだな。やっぱり、言い切ったからには、完売させたかったんだろうな。

でも、スパイスはともかく、保存食はなかなか難しいか。

最悪、保存食は俺たちの旅にも必要なものだからな……。俺たちが食べるからいいんだけど。

次に仕入れるなら、もうちょっと普遍的な価値があるものがないだろうか。できれば食品以外。

となると、装飾品とかかな……。さすがに宝石商みたいな事は無理だよな。

その辺は、おいおいキヨカと相談すればいいだろう。それに、俺たちの旅の目的はそれじゃないもん。

「それじゃ、お店も解約した方がいいかな。明日、案内所に行って訊いてみるよ」

「でも、まだ商品があるだろ？」

「そうだけど、別にお店を借りなくてもいいじゃない。私が売り歩けばいいわけだから」

「そっか。店舗が必要なければ、賃料がいらぬもん」

店舗が必要ないのに、賃料を払い続けるなんて、これほど莫迦らしいものはない。

「そうだな」

「とにかく、明日の分も賃料がいるなら、明日もお店には出してみるけどね」

「そうだな」

契約がどうなるかだな。一日分が無駄になりそうなのはもったいないけど、今回ばかりはしょうがない。

「そういえば、ファイの方はどうだったわけ？ きちんと教えてもらえそう？」

今度は俺の話か。

「ああ、俺の方が。それに関しては大丈夫そうだ。俺がついていければの話だけだな」

ミカツチさんは、師としては申し分ない。あれ程の腕前の人に教えてもらえるなんて、まずないだろう。そんな相手に巡り会えるなんて、それでもって、修行までしてもらえるなんて、幸運すぎるってなもんだ。

「どういう事？」

「教えてくれる事になった人がさ、すっげえ腕前なんだよ。じいさんですら全く相手にならない感じなんだ」

「そんな人なの？ だって……」

「信じられないかもしれないけど、俺なんかじゃ手も足も出ないんだ。じいさんもすげえのはわかるんだけど、なんだかもう別次元っていうかさ、刀を交えてこそってな感じかな」

「ふうん……。ファイがそう感じたならそうなんだろうね。それにしても、すごい人がいるんだね」

「ああ、そんな人に教えてもらえるなんて、願ったり叶ったりって感じだよな」

「そうだね。………ちなみに、その人って男の人？」

「女の人だった」

そう答えた瞬間、キヨカの周囲の空気が凍った気がした。

「女の人なんだ。ファイは、その人と一日、手取り足取り腰取り……一緒に汗を掻(か)いていたんだね」

「………その表現はどうかと思うぞ」

表現はともかく、一日一緒に汗を掻いていたのは間違いないよな。もっとも、キヨカが想像しているものじゃないけど。

「そっか……。その人って綺麗？」

はあ～とため息を吐く。

「お前な、そんなのわかるわけないだろ」

「あ、そっか。仮面か」

自分の顔を触って、ようやく気付いたらしい。この国にいる間は、素顔を知る事はできない。

「そういうわけだ。だから、相手が男だろうが女だろうが関係ないっての」

「いや、それはないね。美人かどうかはわからなくても、やっぱり女の人ってだけでデレデレするんだよ」

「そんな余裕はないっての」

確かに食事時なんかは楽しかったけど、ほとんどは修行時間だ。そんな時に、相手がどうのなんて考えてられない。ミカツチさんの修行についていっただけで精一杯だ。

「本当かな……。まあ、そういう事にしておくか」

「シータも来ればいいだろ」

「なに？ ファイは私も一緒にくんずほぐれつしたいの？」

「だから、そういう発想をやめろっての」

「でも、保存食が完売したら見に行こうかな。他にする事もないし」

「ああ、そうすればいいさ」

疑われるような事はなにもしてないわけだから、いつ来られても問題ない。疚しさも後ろめたさもないもんね。

「じゃあ、保存食をさっさと完売するために、今日はもう寝るね」

「ああ。俺も今日は疲れたからな。とっとと寝るか」

ミカツチさんとの修行でかなり疲れた。それに、ゆっくり休まないと明日動けなくなるよな。

と、キヨカを見ると既に眠っていた。

初めての商売で緊張もしてたんだろう。

「おやすみ」

さて、俺も寝よう。

「う、動かない……」

目が覚めると、全身が動かなかった。

拘束(こうそく)されているわけじゃない。

ましてや、キヨカがなにかをしているわけでもない。

「筋肉痛……だと？」

これは筋肉痛に間違いないだろう。だけど、全く動かせないってのはどうなんだ？ 確かにミカツチさんの修行はきつかったけど、ストレッチもしっかりしたし、終わった後もきちんとした。

それなのに、これはどういう事なんだ。

「っててて」

動かそうとすると全身が痛む。

こんな筋肉痛は、じいさんとの修行でもあった。だけど、それはほんの一回か二回だ。しかも、かなり初期。

最近じゃ、少しくらい痛む事はあっても、動かせないという事はなかった。

それなのに、これは……。

この旅に出てから、何度もこんな事になってるよな。

蟲(ベステート)と対峙した後なんかは、動けなくなる事もあった。

相手が蟲(ベステート)だと、対人修行じゃ無理なんだ。

かといって、まさか蟲(ベステート)相手の修行なんてな……。

だけど、ミカツチさんの修行はどこかそういう感じがする。確かに対人相手ではあるけど、その先にもっと強大なものがある気がする。

「もしかして、ミカツチさんも……？」

いやいや、そんなはずはない。

だけど、それに近いなにかはある。

かといって、それについては訊けないんだよな。訊いちゃうと、俺もミカツチさんも退国させられてしまう。

それよりも、今は筋肉痛だ。

動かない……。

動け。動け俺の体。

無理に動かそうとすると激痛が。

ミカツチさんには、今日も行くと言ってるのに……。

だけど、仮に行けたとしても、なにもできないよな。

本当にどうなってるんだ？

今までだって、修行をサボっていたわけじゃない。それなりに続けていた。だから、こんな急激にくるなんて、あり得ないはずなんだけどな……。

考えられるのは、ミカツチさんの特訓メニューが、効果的だったって事だよな。効果的すぎたから、一気に体にきたんだろうな。

って事は、この痛みが消えたら、俺は強くなってるのかな。だといいな……。

「おはよう、ファイ」

俺が足搔(あが)いていると、キヨカが目を覚ましたようだ。

「おはよう、シータ」

「どうしたの？」

じっと動かない俺を、不思議そうに見ている。

「筋肉痛で動けない」

「……………」

完全に呆れてるな。そりゃそうか。筋肉痛で動けないなんて、情けないにも程があるよな。

「ファイって、軟弱だね」

「……………」

なにも言えません。仰る通りです。

「じゃあ、今日はまた寝てるの？ っていうか、ファイってなにかあったら、次の日って絶対寝込んでるよね」

「……………そうだな」

仰る通りです。

「もっと鍛えた方がいいよ。……って、今それをしてたのか」

「本当にすまん」

「じゃあ、今日はどうするの？ 道場行けないんでしょ」

「そうだな」

この調子じゃ、とてもじゃないが道場には行けない。

「それじゃ、今日は休むって伝えないといけないんじゃないの？」

そういえばそうだな。無断で休むと心配させるかもしれないよな。だったら、きちんと連絡しないと。

……って、どうやって連絡するんだよ。

この世界には携帯電話なんてないんだぞ。そもそも、固定電話もない。無線機もなさそうだ。

その辺は、かなりアナログだ。

手紙だって、それなりの日数を要する。すぐに渡せるような近場だったら、自分で直接行けばいいだけだもんな。

遠くへはやっぱりそれなりにかかる。

「しょうがないな。私が行ってきてあげるよ」

「シータが？」

「私しかいないでしょ。どうせ、案内所に行かないとだし、お店を開けてても、この時間はほとんど……っていうか、全然人がいないもんね」

「そうなのか」

食事時にしか行ってないからだろうけど、賑わってるイメージはあったんだけどな……。

「じゃあ、頼む」

「そのついでに、ファイの師匠がどんな人か、品定めしてくるね」

……こいつ、さらっと言いやがったな。まあ、疚しいものはないんだけど。

「まあ、好きにすればいいって。別にシータが考えてるような気持ちはないからさ」

「そうなんだ」

納得してるんだかどうなんだか微妙だな。別にどうでもいいけどな。

「とにかく、俺が休むって事だけ伝えておいてくれ」

「は〜い。じゃあ、ファイは一日……もしかしたら数日、ゆっくり寝てなさいね」

「ああ」

本当に情けないな。でも、動けないものはどうしようもない。

キヨカは出掛ける準備をして、美味しい朝ご飯を食べに出て行った。そのまま道場に行って、案内所に向かうらしい。

ああ、俺の飯は……ないよな。

さて、トールちゃんの先生ってどんな人なんだろう。やっぱり美人さんなのかな。

確かに素顔は仮面でわからないけど、雰囲気でなんとなくわかるような気がするんだよね。

朝ご飯は適当に……っていうか、お粥のお店があったね。そこにしよう。

ちゃちゃっと食べて、道場に行こう。

どんな人なのか楽しみだな……。

えっと、この道でいいんだよね。

なんだか、誰もいないんだけど……。

本当にこんな所なのかな。

でも、学校みたいなものがあるから、きっとこの辺りなんだろうね。

しばらく歩いていると、小屋のようなものが見えてきた。そこから声が聞こえる。

まさに剣道場って感じの声だから、きっとここだろう。

ちょっと緊張しながら門を叩く。

美人が出てきても困るけど、屈強な人が出てきても困るよね。

怖い人はいないよね。

っていうか、そもそもここでいいんだよね。

緊張しながら待っていると、中から人が出てきた。

「おわっ」

その人の仮面に思わず声が出る。

紫と黒をベースにして、目玉が四つあるなんとも不気味な仮面だった。

「あなたは？」

声でわかったけど女の人だ。じゃあ、この人が？

「あの……ミカツチさん、ですか？」

「はい、そうです」

って、訊かなくても仮面を見ればわかるよね。よく見たら、ちゃんと名前彫ってるし。

「シータさん……ですか。わたしになにかご用でしょうか」

「あ、あの……」

妙に緊張しちゃって声が出ない。

「ファイの事なんですけど……」

「ファイさんのお知り合いの方ですか。ファイさんが、どうかされたのですか？」

「……は、はい。ファイが筋肉痛で動けないので、今日は休みます」

言えた。ちゃんと言えたよ。

「そうですか。……わかりました」

「じゃあ、そういう事で」

「まさか、一日だけで……」

ミカツチさんはなにか呟いているけど、私の役目は終わったよね。

「それじゃ、失礼します」

「あ、はい。わかりました。お大事にとお伝え下さい。そして、ゆっくりと休んで下さいとも」

「わかりました」

ぺこりとお辞儀をして挨拶。

よし、終わったぞ。

ミカツチさんか……。きっと綺麗な人だろうね。ちょっと懐かしいというか、親しみは感じるけど、美人は毒だよね。私のトールちゃんを誘惑しなければ別にいいんだけど。

翌日、まるで生まれ変わったみたいだった。

昨日までの痛みはなく、体が軽い。

「どうなってるんだ？」

違う体じゃないよな。俺だよな。自分の体を見るが、間違いない。俺の体だ。

「どうしたの？ おはよう」

キヨカがもぞりと起き上がる。

「今日は大丈夫なの？」

目をこしこしと擦りながら訊かれる。

「ああ、問題ない。むしろ絶好調だ」

「ほへ？ そうなんだ」

「ああ。生まれ変わったみたいに体が軽いんだ」

「そうなんだ。とにかく大丈夫なんだね。よかったよかった」

起き抜けだからというのもあるんだろうけど、返事が適當すぎる。

まあ、キヨカにこれはわからないよな。俺自身も戸惑ってるくらいだし。

とにかく、今日はミカツチさんの道場に行けそうだ。

昨日は休んでしまったわけだし、今日は少し早めに行こう。まだミカツチさんがいなければ、あの辺でランニングしてればいいし。

昨日一日寝ていた分、今日は思い切り動きたい気分だ。

「シータ。悪いけど、今日はもう出るわ」

「.....もう？ 早くない？」

「ああ。だけど、妙に動きたい気分なんだ」

「そうなんだ。無理しないでね。私は、駅の近くで売り子さんしてるよ」

「ああ、シータも頑張ってるな」

「うん。私はもうちょっと寝るね。行ってらっしゃい」

そう言って、キヨカはもう一度眠り始めた。

まあ、いつもよりは早いわけだし、二度寝は気持ちいいもんな。

さてと、俺は出掛けるとするか。

「行ってきます」

眠っているキヨカに声を掛けて出掛ける。

今日も相変わらず人に出会わない。

朝早いというわけでもないだろう。ちょっと気分もいいし、軽く走っていこうか。

そうと決まれば、入念に準備運動をする。これを怠ると怪我の元だからな。基本は外さない。

体操とストレッチで、全身をほぐしていく。昨日眠っていたから、余計にきちんと伸ばさないと。普通なら体が固まってる感じなんだけど、そうでもないんだよな。だからって、ストレッチはきちんとしなきゃだけど。

「よし、こんくらいすればいいだろう」

ストレッチをしていたら、いい感じの時間になっていた。まあ、本当にちゃんとすれば一時間は掛かるしな。

寝起きに感じた軽さに、ストレッチをした事でさらに軽く感じてくる。

なんだか、このまま飛べそうな軽さだ。いや、飛ばないけど。でも、そのくらい軽い。

軽くジョギング気分で走り出す。

「うおっ、なんだこれ」

軽く流す程度に走っているつもりなんだけど、景色の流れ方が違う気がする。全力走まではいかないにしろ、いつものマラソンくらいじゃないだろうか。

「本当に俺の体なのか？」

信じられない。

普段よりも速いペースなんだろうけど、息が切れる事もないし、疲れを感じる事もない。むしろ、まだまだ走れる感じだ。

かといって、ここで無理をして体を壊してもいけないので、ペースを上げる事はしない。

だけど、思ったより速かったらしく、あっという間にミカツチさん道場に到着した。

「はっ！ やっ！ はっ！」

中からは、既にミカツチさんの声がしている。

「これなら別にいいよな」

俺は扉をノックする。

「はい、どうぞ」

ミカツチさんの返事があったので中に入る。

「おはようございます。本日もよろしくお願いします」

礼をしてから道場に入る。これはもう、昔からの習慣みたいなものだな。

「おはようございます、ファイさん。体はもういいんですね」

「昨日はすみませんでした」

「いえ、むしろ驚きでした」

「驚き？」

どういう事だ？

やっぱり、修行していたと言ってたくせに、動けなくなって失望したって事なのか？

「はい。あれだけすれば、初めての方は必ず数日後には動けなくなります。それというのも、恐らくは今までの体から新しい体へと変化するからだと思います」

「新しい体？」

「はい。ほとんどの方は、特に体質を変化させず、普段の生活のまま剣術をされています。ですが、わたしのあの修行をすれば、剣術に適した体が変わるのです」

「剣術に適した体……」

「といたしても、本来持っている力を解放させただけなのです。ですので、今感じておられるものは、ファイさんが本来持っていた資質なのです」

「そうだったんですか」

なんだ、それ。ある意味、体を改造されたみたいなもんだよな。

「その変化は、大抵の方は数日後なのです。それが翌日という事は、ファイさんの体が既に変化し、その変化を受け入れる事ができたという事になります」

「それって……」

「素晴らしい事だと思います。わたしもこの修行を初めてされた時は、二日後……正確には翌日の日暮れ頃に、体が動かなくなりまして、師匠に同じ様な事を告げられました」

「……そうなんですか」

ミカツチさんもこれを……。そのミカツチさんよりも、俺は早く変化を受け入れたって事になるのか？

本当なら嬉しいんだろうけど、ミカツチさんの領域まではまだまだだし、こんな事で喜んでる場合じゃないよな。

「感覚としてはいかがですか？ なにか変化は感じられますか？」

「そうですね、やっぱり全然違います。起きた瞬間から、体が軽くて別人みたいでした」

「既に体感されている様ですね。でしたら、早速準備を整えて手合わせしてみまじょうか」

「えっ？ いきなりですか」

「はい。どの程度の変化なのか、自身で判断するためという事と、わたしがファイさんの変化を体感するためにお願いします」

「いえ、俺こそ、いきなりミカツチさんと手合わせできるなんて……。是非お願いします」

夢じゃないだろうな。

こんな風に体が変化したのも夢みただし、いきなりそれを試す事ができるなんて、どう考えても夢としか思えない。

夢から覚めたくないけど、頬を抓(つね)ると……、

「痛っ」

夢でも痛みは感じるらしいけど、痛って事は現実って事でいいよな。

本当に本当なんだ。

「それでは、体を解しましょうか」

「はい」

軽く走ってきて体は温まっているけど、柔軟はしつこいくらいにしておかないとな。

それはわかってるんだけど、今はその時間も惜しい。早くミカツチさんと手合わせしたい。

「それでは始めましょうか」

いつもよりかなり長く感じた準備を終え、俺たちは竹刀を持って道場の真ん中に立っている。

ようやくミカツチさんと……。

すっげえ緊張する。

「それでは、参ります」

「はい」

竹刀の先を合わせて、少し距離をとる。

相手の呼吸を読みながら間合いをとる。

相手の必殺の間合いに入ったら負けだ。だけど、それはこちらの間合いでもある。

勝負は一瞬だろうな。

ミカツチさんの剣戟を避ける事はできないだろう。

こっちが攻めないと、受けにまわったら負ける。

だけど隙がない。

打ち込む事ができない。

どうすればいい。

このまま膠着状態を続ける……わけはなかった。

ミカツチさんが動いた。

とても綺麗な足の運びで、一気に間合いを詰められた。

ミカツチさんの竹刀が目の前に。

負ける。

それでも、反射的に体が動く。

乾いた音がした。

……………嘘だろ。

偶然だろう。

こんなの偶然に決まってる。

俺が受ける事ができるなんて……。

だけど、こんなチャンスを逃すわけにはいかない。

竹刀を引いて、距離をとる。

そして、一気に打ち込む。

が、ミカツチさんは簡単に受け止める。

やっぱり、すんなり通らないよな。

ここからだ。

昨日までは動かなかった動きが、今日はできる気がする。

そのまま滑らせるように角度を変え、竹刀をずらして再び打ち込む。

「くっ」

しかし、それすらもミカツチさんは受け止めてしまう。

まさか俺の動きを予想していたはずはない。瞬間に対応されたんだ。

このまま竹刀を合わせていても、俺に勝機はない。

ここは一気に攻めずに、距離をとってから……、

「うっ」

その瞬間、俺は負けていたらしい。

胴に竹刀が綺麗に入った。

「ありがとうございました」

俺は蹲って立ち上がれない。

「……ありがとう、ございました」

膝を突きながらも挨拶だけはする。

「大丈夫ですか？」

ミカツチさんが差し出してくれた手を取り、のっそりと立ち上がる。

「やっぱり、ミカツチさんは強いですね」

完敗だ。

やっぱりミカツチさんには勝てなかった。

もっとも、この時点の気持ちで負けていたのかもしれない。

それを除いても、ミカツチさんの剣技は、俺には到達できていない領域だ。

「いえいえ、ファイさんはかなり強くなっていますよ。最後は、本気を出さないと勝てませんでしたから」

マジで？ ミカツチさんが本気？

それって、俺がそこまでミカツチさんの実力に迫ったって事なのか？

いやいや、そんなのミカツチさんのリップサービスだろ。そこまで俺ができていたとは思えない。

「ですが、やはりファイさんには、速度よりも強さ——剣戟の重さの方が向いている様ですね」

「……そうですか。それでも、俺は……」

「はい、わかっています。それでも、速さを求めるのですよね」

「はい」

やっぱり、俺には向いてないんだらうな。だけど、風伯を使うなら、スピード重視だ。パワーよりもスピードが必要になる。それこそ、風を斬り裂くだけのスピードが必要だ。

「ファイさんの成長がわかりましたので、今日はそれを踏まえて修行をしましょう」

「はい」

「まずは、走りましょうか」

「……はい」

ちょっと躊躇してしまう。というのも、一昨日は、半分の距離でダウンしてしまったからな……。

「今日は大丈夫ですよ。まずは、二里を走ってみましょうか」

一昨日のリベンジだな。

「はい」

今日こそは走りきってやる。

「それでは、軽く体を解してから行きましょうか」

「はい」

二里を走りきるのが今日の目標かな。

俺たちは、準備運動をして、軽く走ってから、ついにスタートとなった。

嘘だろ。

体が軽い。ここに来る時もそうだったけど、体が軽くて走りやすい。

それでも、息が切れてきている。

「ミカヅチさん、速くないですか？」

一昨日よりも、ペースが速い気がする。こんなペースだったか？

「ファイさん、大丈夫ですか？」

俺の質問の回答はないようだ。

「大丈夫、です」

息は切れているけど、まだ走れないほどじゃない。

「無理をせず、休む時は休んで下さいね」

「……………はい」

今日こそは走りきって決めたからな。そう簡単に諦めるわけにはいかない。

ミカヅチさんは、時折チラリチラリと俺の方を見ながら走っている。

こりゃ、疲れを見せられないな。

限界を超えるには、少しだけ無理をしないと。今までそうしてきたから、どうしても少しだけの無理をしてしまう。

「本当に大丈夫ですか？」

「はい、まだ大丈夫です」

本当はそろそろ限界かもな。これ以上は、この後に響くだろうな……。

っていうか、まだ八キロじゃないのか。

普段、そんな距離を気にして走り込んでないからよくわからないんだよな、そういう距離感が

。

「それでは、もうすぐ到着です」

おっ、到着か。

これで八キロか……。今日は走り切れたな。

「お疲れ様です。到着しました」

「終わった……って、ここは……」

目の前には、ミカツチさんの道場が。どうやら、ちゃんと戻ってくるルートだったみたいだな

。

「はあ～、疲れた」

結構走ったので、急には止まらず、クールダウンのために軽く走る。

ミカツチさんも軽く走りつつ、徐々にスピードを落として、早歩きをしつつ、腕を回したりしている。

呼吸が整い、心臓の鼓動も落ち着いてきてようやく座り込む。

「疲れた……」

ほとんど全力疾走だったからな。

それにしても、自分でも信じられない。

まさか、八キロなんて距離を、あんなスピードで走り切る事ができるなんてな。フル馬拉ソンをあのスピードで走れたら、オリンピックどころか、世界記録だって狙えるだろう。まあ、五分の一程度の距離だからこそのペースなんだけど。

「お疲れ様でした。このわずかな時で、あれ程の成果を得られるとは驚きです」

「まだ、ミカツチさんについていっただけで精一杯ですよ」

謙遜でもなんでもない。現にミカツチさんは、息を乱していない。俺なんか、完全にヘバってるのに。

この人は本当にすごいよ。

「そんな事はありません。もの凄い進歩です。実は、一昨日よりも、速く走ってみました」

「本当ですか」

体が軽く感じたから気付かなかった。一昨日よりペースが速かったのか。確かに、思い返してみれば、体が軽くなった割に、疲れるのはそんなに変わってないな……とは思ったんだ。

「それに、実は走った距離は二里ではないんです」

「えっ？」

二里じゃないって……。そういえば、コースが違っただけだと思っていたけど、昨日途中で倒れた場所を折り返したわけでもなかった。見覚えのある景色というか、なんとなく見た事があるな……と思った場所は、意外と早く通り過ぎていた。

「二里じゃないって事は、やっぱり短く……？」

「いえ、逆です。おおよそ三里を走ってみました」

「三里……」

三里って事は、一二キロ？ そんなに走ったのか。距離もそうだけど、あのスピードでそんな距離を？

長距離のペースじゃなかったぞ。短距離とまではいかないまでも、中距離のペースで走っていた。

「速さも距離も、段違いの成果です。わたし自身、ファイさんがそこまでとは想像していませんでした」

そりゃそうだろうな。俺自身も驚いている。こんな事ってあるのか。本当に信じられない。

「ご自身ではいかがですか？ 変化は感じられましたか？」

「変化どころじゃないですよ。本当にそんなに走ったんですか？」

「はい」

「信じられません。俺は、二里を走る事だけ考えていて、それ以上を走ったなんて……。ほとんど昨日の今日って感じで、そんなに変わるなんて……」

どんな風にすれば、そんな劇的に変わるんだよ。まあ、実際こんなに変わったわけだけども。

それにしても、あり得ないだろ。

どんなマンガでも、一日で別人のように……なんて、出来過ぎてるぞ。

でも、そんな事があるんだ……。

「それでは、昼食を摂ってから、剣術の指南をします」

「……はい、お願いします」

「昼食の用意をしますので、しばらく休んでいて下さい。今はゆっくり休まれないと、急激な体の変化で、体調を崩してしまうかもしれませんので」

「……はい」

ここは言われた通り、おとなしくしていないとな。

いくら体が変化したといっても、俺自身がそうであるように、精神的にはついていけない

。

疲れなんかもあまり感じていないが、筋肉なんか一日でそう変わると思えない。気付かない痛みがあるはずだ。

これで、また明日は筋肉痛で動けないなんて事はないよな。

これの繰り返しってのは、さすがに勘弁したいとこだよな。

そんな事を考えてると、本当になりそうで怖い。

今は休もう。

肩や腕を動かしながら、昼食ができるのを待つ。

昼食を終えて、午後からは剣術の修行だ。

朝に少しだけ手合わせしたので、どれくらいになったかはわかる。

だけど、まだまだミカツチさんと対等に……そこまではいなくても、少しでも近付けるようになるには、まだまだ実力が足りない。

こんな事じゃ、とてもじゃないけど、蟲(ベステート)と闘うのは無理だろう。

少しでも蜘蛛(アラネーオ)を負担を減らそうと思えば、こんな事じゃダメなんだよな。もっと上を目指さないと。

もっとも、人を相手にするのと蟲(ベステート)を相手にするのは違うけど。

「それでは、素振りを始めて下さい」

「はい」

俺はミカツチさんの指示で、鞘に入ったままの風伯を持って素振りを始める。

やっぱり軽いな。

今までよりも、風伯が軽く感じられる。

心を静めて、風伯と一体になるのを想像して、ゆっくりと語りかける。

なあ、もう一度力を貸して欲しい。これ以上、蜘蛛(アラネーオ)に負担をかけるわけにはいかなんだ。それに、キヨカを危険に晒すわけにはいかないんだ。

俺がなんとかしないと。

できるはずなのに、それができないのが悔しいんだ。

まだ再び風伯の力を使えるようにはなっていない。もう一度、風伯の力を引き出せるようにならないと。

いくら剣技を上達させても、風伯の本当の力を引き出せないと勝てないだろう。

対人であれば、剣技だけで充分なんだけど、やっぱり蟲(ベステート)相手だとそうはいかない。

素振りをしながら、何度も何度も風伯に語りかける。

風伯。

応えてくれ。お願いだ。

風伯。

ふわっと風を感じた。

「風伯？」

思わず手が止まる。

「どうかしましたか？」

ミカツチさんが訊いてくる。そりゃ、いきなり止めたら気になるだろう。

「いえ、すみません」

素振りを再開する。

だけど、さっきの風が気になってしょうがない。

「集中出来ていませんよ」

「はい、すみません」

ミカツチさんには、簡単に見抜かれてしまっている。

集中しないと。

だけど……。

さっきの風は気のせいだろうか。

……いや、そんなはずはない。確かに感じたんだ。あれは、風伯の風だった。

もしかして、風伯が応えてくれたんじゃないだろうか。

できればそう思いたい。もう一度、風伯が俺を認めてくれたんだとしたら、これほど嬉しい事はない。

「ファイさん、外に出てみましようか」

「えっ？」

素振りを止め、ミカツチさんに訊く。

「どういう事ですか？」

「その刀が、力を出したそうにしている様です。なにもない場所で、思い切り力を解放してみてはいかがですか？」

「……………いいんですか？」

「ええ、もちろん」

俺からすれば、願ったり叶ったりだ。

風伯の力を解放できるんだとしたら、試してみたい。

……でも、どうしてミカツチさんはそんな事を……。

まあ、ミカツチさんくらいなら、刀の気持ちだってわかるのか？

でも、能力までわかるとも思えない。

……………まさか、本当にそんな事までわかっちゃうのか？

だからって、ミカツチさんは刀の気持ちがわかるんですか……なんて訊けるわけもない。真相は闇の中だな。

そういうわけで、道場の外に出る。

日差しは強いものの、それほど暑くもなく、むしろ風が冷たくて気持ちいい。

「この先に、なにもない草原があります。そこでしたら大丈夫でしょう」

ミカツチさんに案内され、その草原に向かう。

そこは小高い丘になっていて、遠くの方には荒野も見える。

そういや、列車の旅はあんな景色ばっかだったな……。

そんな事も思いつつ、なにもない草原に立って風伯を構える。

「……………」

緊張する。

風伯の力をまた使えるのだろうか。

俺は少しだけ成長した。

だけど、風伯と心を通じ合わせられたかはわからない。

これでもし、風伯が応えてくれなかったら……。

まだまだなんだとは思うけど、やっぱりショックだよな。

風伯と一緒に闘いたい。

俺には風伯が必要だ。風伯なしじゃ、大切なものや大切な人を護る事ができない。

だから頼む。風伯よ、応えてくれ。

ゆっくりと目を閉じ、風伯と自分をひとつにする。心を静め、風を感じる。そして、風伯の風を感じる。

イメージするんだ。

風伯を風が包み込むイメージ。

俺自身が風を纏っているイメージ。

その風を大きくするんだ。

感じろ。

感じるんだ。

イメージだ。

イメージしろ。

風伯よ、応えてくれ。

「……っ！」

一瞬、なにかがフラッシュバックした。

目の前にある赫(あか)。

飛び散る赫。

赫く染まる世界。

そんな光景が……。

「うっ！」

そのフラッシュバックに耐えられず、片膝を地面につく。

「……………」

目を開けると、ミカツチさんは黙って見守っていてくれる。

それだけで安心する。

それにしても、なんなんだ、あれは。

赤いものが飛び散っている。

なにかが横たわっている。そこが赤く染まっていく。大地が染まる。

そして、金属のような臭い。

———血だ。

これは、血なんだ。

なんだってんだよ。

どうして、こんな……。

「あっ」

断片的に記憶が甦る。

むしろ、どうして忘れてたんだ？ いや、当然か。

俺の心が押し潰されてしまう。だから、忘れていたんだ。

なにもかも、俺を護るために。自分で忘れたんだ。

だけど、それが引っかけりになっていたんだ。

なるほどな。

風伯が応えてくれなかったのって、もしかしてこれのせいなのか？ 俺がこれを克服しない限り、風伯はその力を貸してくれないってのか？

だったら、技術がどうこうじゃないじゃないか。完全に精神的なものじゃないか。

それを乗り越えるなんて、なかなかハードだな。

だけど、俺はもう一度風伯と一緒に闘うって決めたんだ。だから、克服してやるぜ。

風伯、ちゃんと俺を感じろよ。俺は絶対克服してやるよ。

.....正直なところ、難しいかもしれないけどな。

人の生き死になんて、できれば関わりたくないからな。

だけど、それから目を逸らすわけにはいかない。

なにせ、俺だって生きてるんだ。そして、いつかは死ぬんだ。

だから、これは日常なんだ。

当たり前な事なんだ。

その事を受け入れられなくてどうするよ。

.....まあ、実際、俺は受け入れる事ができなかったわけだけど。

それでも、これから少しずつ受け入れてやるぜ。

すっくと立ち上がり、もう一度風伯を構える。

俺のトラウマがわかったんだ。これは収穫だった。これで、どうすればいいかわかった。

完全には無理でも、徐々に受け入れていければいい。

いきなり変わるなんて無理だ。そうだろ、風伯。

確かに今すぐは無理かもしれない。今は情けないままかもしれない。

だけど、俺は必ず受け入れてみせる。

別に慣れるわけじゃない。受け入れるんだ。目の前の現実を認めるんだ。

そうだろう？ それでいいんだろ？ なあ、風伯よ。

びょううっ！

うおっ！

体の中を風が通っていった。

頭の中から足の先まで、一気に風が貫いていった。

風伯.....。

もしかして、これならいけるか？

風伯を構える。

頼むぞ。

ふわっと風が俺を包み込む。

いける。

サンキュな、風伯。

まだまだ未熟かもだけど、俺はお前の期待を裏切らないようにするぜ。

目を開けると、風伯を風が包み込んでいる。

「よし」

久しぶりの感覚だ。

風伯の力を引き出せた。

久しぶりに風を感じる。

さあ、解き放とうか。

「いっけえっ！」

誰もいない、なにもない場所に向けて、風伯の風を一気に放つ。

ごううん！ と轟音とともに、一陣の風が世界を駆けていく。

「……………」

その様子を、ミカツチさんはぽかんと見ている。

「まさか、これ程とは……。さすが伝説の四刀。この力があれば、わたしたちは……」

なにかを呟いているみたいだけど、風の音にかき消されて聞こえない。

風伯が放った風が、やがて世界に溶け込んでいく。

「やった……………やったぞ」

時間をおいて、ようやく実感する事ができた。

俺は、風伯の力を使う事ができた。

しかも、なんだか前よりもすごくなった気がする。

「素晴らしい力でした」

「ありがとうございます。ミカツチさんのお蔭です」

「いいえ。これは全てファイさんの成果です」

「俺だけじゃ、どうにもなりませんでした。きっかけを与えてくれたのはミカツチさんです」

「……………わたしは、本当にきっかけを与えたに過ぎません。全ての事は……」

「これで、ようやく一歩進めた……」

これ以上は、不毛な言い合いになりそうなので、無理矢理話題を変える。

「これからもっと修行して、もっと強くならないと。まだまだ足りない」

「わかりました。ファイさんの力を拝見させて頂きましたので、これからの修行内容を考えましょう。あの力を出すには、速さだけでなく力強さも必要でしょう」

「速さだけじゃなくて、力強さも……」

確かにそうかもしれない。

一閃するだけなら速さだ。だけど、ああして風を集めて放つには、力も必要になってくる。

ミカツチさんは、俺には速さよりも力が向いているって言ってたっけ。速さと力強さ。相反する感じがしなくはないけど、それをバランスよく修得できれば……。

それでようやく、蜘蛛(アラネーオ)と一緒に戦う事ができるかもしれない。

「よろしくお願いします」

「はい。……ひとまず今日は、道場で基礎体力の向上を目指しましょう。やはり、基礎は重要ですので」

「わかりました」

その後は、道場に戻って筋力トレーニングなんかをずっとした。

「ありがとうございました」

日が暮れてきて、今日は終わりとなった。

本当なら、まだまだしたいところなんだけど、トレーニングのし過ぎは、体を壊すだけなので、それ以上は我慢だ。

もちろん、帰ってからこっそりしようものなら、翌日ミカツチさんに見抜かれてしまうだろう。

ここはおとなしく休む事に専念しよう。

ミカツチさんの修行は、きっちりと休む事で身につくみたいだし。

「明日は、風伯の力をさらに引き出すために、ファイさんの戦い方を、体に教え込みます」

「はい、お願いします」

俺に向いた戦い方。

もちろん、じいさんだって剣術で、俺に向いた技術を教えてくれている。だけど、それは一般的な剣術だ。剣道の試合でしか通用しないものだ。

もちろんそれを下敷きにしてになるけど、風伯を使った戦い方を体に記憶させないといけない。

「それでは、今日はゆっくり休んで下さいね」

「はい。ありがとうございました」

深々と礼をして帰路に就く。

「そういえば、シータはどうなったんだろうな」

今日は色々と手続きもしないといけなかっただろうし、保存食を売るんだって意気込んでたし……。

「まあ、部屋に戻ればわかるか」

というわけで、部屋に戻ってくると……。

「どうしたんだよ」

部屋の真ん中で、キヨカが大の字で腹這いになっていた。

「ファイ……………」

今にも泣きそうな声だ。

なんだか、キヨカラしくない。

「どうしたんだよ、そんな風になって……」

「ごめん……ダメだったの」

ダメだった？

「なにがだよ。もしかして、店の契約で不備があったとか？」

「ううん、それは大丈夫。ちゃんと処理できてるよ、昨日言ったでしょ」

まあ、昨日の時点で終わってる事だからな。でも、後からなにか不備が見つかったとか、そういう事を考えるだろ。

「じゃあなんだよ。……って、保存食か？」

コクリとキヨカの頭が動く。

はあ～、それかよ。

「売れなかったのか？」

ふるふると頭が動く。

あれ？ 違うのか？

売れなかったから、こんな状態になってるんじゃないのか？

「だったらなんだよ。なにがダメだったんだよ」

「……………完売できなかった」

「……………」

完売できなかった？

って事は、少しは売れたって事なのか？

「なあ、どれくらい売れたんだ？」

「えっとね……一つ」

「……………はい？」

一つ？ 一つだと？ それって、売れるには売れたけど、ほとんど売れてないに等しいよな。

それで、こんな状態なんだろうな。

「でもまあ、一つは売れたんだよな」

ちょっとくらいは慰めておくか。

別に責めるつもりは毛頭ないわけだし。

「……………うん」

「列車の出発は明日だろ。明日が本番だろ」

「……………疲れたよ」

どうしたんだ？ キヨカがこんな風になるなんて珍しい。こうまでなるなにがあったんだ？

気になるんだが、この状態じゃ訊くのもな……。

今日は、そっとしとくか。

「ねえ、ファイの方はどうだったの？」

そっとしておこうと思った途端、キヨカの方から話し掛けてきた。腹這いのままなので、声がちょっとくぐもっている。

「俺か？ 俺の方は絶好調だったよ」

「そうなんだ……」

しまった……。余計に落ち込ませちゃったか？

「でも、調子にのりすぎてくたくただよ」

「私は精神的にくたくたなんだよね」

……これも禁句だったのか。

今のキヨカは、なにを言っても禁句になりそうだな。

「ファイは、あの女の人と、一日楽しく汗を流してたんだよね」

「……………そ、そうだな」

なにを言うにも緊張する。

「そっか……。気持ちいい汗なんだろうね」

「……そうだな」

「そっか……。ファイはくんずほぐれつ気持ちいい汗を……」

後半はよく聞こえなかったが、キヨカはなんだか一人で落ち込んでいってる気がする。

「とにかく、今日はもう寝ようぜ。って、そうだ。もう飯は食ったのか？ なにか旨いものを食おうぜ」

「今日は疲れたからいいよ。ファイだけで行ってくれば？」

「……………」

マジかよ。

あのキヨカがそんな事を言うなんて。

もしかして、世界の終わりなのか？ 俺たちは、間に合わなかったんだろうか。

天変地異の前触れか？

「おいおい、シータらしくないぞ」

「もう疲れたから寝るね。おやすみ」

と、そのまま寝ようとする。

「おい、せめてベッドに入れって」

「……無理」

しょうがないな……。さすがに、このまま放置しておくわけにはいかないもんな。

「風邪ひくぞ」

しょうがないので、キヨカを抱えてベッドに連れていき寝させる。

「……………ありがとう」

「あ、ああ……」

いつもなら、もうちょっとなにかリアクションがあったりするのに、こうもなにもないと変な感じだな。

これはこれで淋しいというかなんというか。

……さて、どうするかな。

キヨカがこういう状態で、俺だけ食べに行くのは気が引けるんだが、修行の事を考えれば食べないといけないよな。

体調を整えるのも、体を作るのも修行だし。

「シータ、悪いけど、俺だけで行ってくるな」

キヨカは、ひらひらと手だけを振って応える。

こりゃ、なにかお土産くらいは買ってきてやるべきだろうか。

一人で飲食街を歩くのはなんだかつまらないな。

美味しそうな匂いは、そこかしこからしてくるんだが、一人だとあまり気乗りしない。

「一人だとこんなに淋しいもんなのか」

常にキヨカと一緒にだと、それが当たり前になってきてたけど、こんなに違うものなんだな……

。

ってというか、この国で生活して、もう一ヶ月くらいは経ってるよな。そんなに長い間住んでると、もうずっと住んでる気になってくるよな。

「まあ、この街に来てからはまだ数日だけ」

同じ国でも、こうも違うのか……という雰囲気だ。最初の街の方が、どちらかといえば活気があった気がする。人も多かった。やっぱり、この国に入る場所だからだろうな。

政治とかそういうのは、あまりなさそうなのに、こうして経済が成り立ってるのって不思議だよな。

誰かが指示して管理してるはずなのに、その姿が見えてこない。

「……な～んて、俺にはどうでもいい事だよな」

今のところ、それらしい不利益もないし、この国に深く関わるつもりもない。

俺がすべきなのは、強くなる事だけだ。

そして、蟲(ベステート)を封印する。

「さて、それも今はおいといて……なにを食べようかな……」

久しぶりに、がっつりと肉系のものを食べようか。

そんな事を考えていると、ちょうどぴったりの店を見つけた。

中からは、肉を焼くいい匂いがしている。

「たまには、こうがっつりいきたいよな」

心躍らせて中に入ると、

「うおっ」

思わず店を飛び出しそうになった。

「う、牛……？」

店主らしい人は、牛の仮面だった。

「いらっしゃい」

威勢よく迎えられたが、なんともシユールだ。

焼いている肉は牛じゃないのかもしれないけど、それにしたって、牛の仮面で肉を焼くなんて……。

ちょっと戸惑いはしたものの席に着く。

「なににします？」

「えっと……おすすめは？」

メニューを見ても内容がわからないので、やっぱりこの注文方法だ。

「そうですね……やっぱり、うちはこれですね」

と、メニューの一つを指した。値段は少し高めだが、手が出せないほどじゃない。

「じゃあ、それをお願いします」

「かしこまりました」

そう言うと、牛の店主は鉄板で分厚い肉を焼き始めた。ステーキみたいな感じなのかな？

それにしても、肉を焼く匂いが、とても香ばしい。牛とはちょっと違う感じだけど、とにかく食欲をそそられる。

これは当たりじゃないか？

しばらくその匂いを堪能していると、焼き上がった肉をさらにのせて、なにやらソースを掛けている。

こいつは間違いなく旨いだろ。

見た感じと匂いだけで充分わかる。

「お待たせしました」

目の前に出された皿を見るだけで涎が出てくる。

なんだか、キヨカに悪い気がしてきた。

だけど、ここは俺の体作りのためという事で……、

「いただきます」

手を合わせてから、ナイフで肉を切る。

じゅわっと肉汁が溢れ、ソースと混ざり合っている。

もうそれだけでたまらんね。なんだろう、この感じ。

一口大に切って頬張る。

「……………」

口を開けるのが残念だ。ずっとこうしてたい。

だけど、肉汁が口の中に溢れて、しかも肉は柔らかくて溶けてしまいそうだ。

さしが入っていたというわけでもないはずだが、すごく柔らかでジューシーだ。

「旨いっ」

消えてしまったのが残念で、次を頬張る。

「旨あっ」

肉そのものが美味しいのもあるけど、このソースもたまらんね。

肉の味を邪魔しないんだけど、だからといって自己主張していないわけでもない。

なんとも不思議なマッチングだ。

このコラボレーションは最強だな。

こりゃ、キヨカにも教えてやろう。これを食べれば、絶対元気になるって。

気が付けば、あっという間に平らげてしまった。なんだか淋しいな。もっと食べていたいんだけど、なかなかのボリュームだったので、満腹になってしまった。

「ごちそうさまでした」

なんだかすっげえ贅沢をした気分だ。これでこの値段ならお値打ちだな。

食べる前は高い気もしたけど、食べてみるとこれほどお得だとはな。

会計を済ませ、部屋に戻ろうと歩いていると、見知った顔を見つけた。正確には、見知った仮面って事になるのかな。

どちらにせよ、この国でそういうのは、キヨカとこの人くらいなんだけど。

「ミカツチさん」

俺が声を掛けると、ミカツチさんは驚いて振り返る。

「ファイさん……。驚きました。まさか、ファイさんにお会いするなんて……」

「俺もです。ミカツチさんも食事ですか？」

「ええ、はい」

「そうなんですか。俺はさっき食べたんですけど、ミカツチさんは……」

「わたしも、先程済ませたところです」

「そうなんですか」

「そうだ。よろしければ、少し歩きますか？」

「……はい」

なんだか不思議な展開だな。

まさかミカツチさんとこうして歩くなんて……。

飲食街を離れて、住居街の方へ行くと、周囲に明かりが少ないので、星がよく見えるようになってくる。空気も綺麗なのか、元の世界で見るとよりも綺麗に思える。

そんな満天の星の下、こうして歩いていると、なんだかロマンティックだよな。これがカップルだったらだけど。

俺たちの場合は、師匠と弟子だもんな。

別に残念ってわけでもないんだけど、そういう雰囲気にならないのは、なんだか残念に思えてしまう。

「そういえば、あの女性の方は？」

「え、えっと……シータの事ですか？」

急な事でドギマギしてしまう。

なんだろう、別に疚しい事をしてるわけじゃないのに、どうしてこんなに焦ってしまうんだ？

余計な事を考えてたせいかも。

「シータさん……その様なお名前でしたね。シータさんは、ご一緒ではないのですか？」

「えっと……シータは部屋で寝てます。ちょっと、今日は疲れたみたいで……。それで、俺一人で食事を」

なんだか、言い訳をしているみたいな感じだな。だいたい、なにに対しての言い訳なんだったの。

「そうですか。それでしたら、ご一緒になくても宜しいのですか？」

「大丈夫でしょう。一人でゆっくり寝てる方がいいでしょうし」

「そうですか……。傍にいて欲しいと思っているかもしれませんよ」

まあ、そうかもしれないけどな。でも、一人になりたい時もあるしな……。

「大丈夫です」

もしかしたら、傍にいて欲しいのかもしれないけど、きっと大丈夫だろう。

「……そうですか。ですが、こうしてわたしと一緒にいるよりも、シータさんの所に戻って下

さい」

「……………まあ、大丈夫だと思いますけど。せっかくミカツチさんと、こうして会えたから、修行じゃなくて普通に接したかったんですけど。残念です」

「それはわたしも同じです」

あれ？ ちょっと冗談のつもりだったんだけど、結構マジに受け止められてる？ ミカツチさんって、かなり真面目だよな。こういう冗談は通じないよな。

「こうして誰かと話をするのは、実は久しぶりなんです。あっ、もちろん、日常で必要な会話はありますよ」

「は、はい、わかっています」

ちょっと慌てるミカツチさんが新鮮で、こっちまで慌ててしまう。

「それに、どこかファイさんは、わたしの故郷の雰囲気があるといいますか……どう説明すればいいのかわからないのですが……」

「似た空気というか、同じ匂いって事ですか？」

「そうですね。そういう感じだと思います」

「そうなんですか。実は、俺もそんな感じは少しあったんです。詳しくは話せませんが、俺が住んでいた場所というか、国の雰囲気がミカツチさんにはあるというか……」

「そうだったんですか。ファイさんも……。それは、自然とを感じるものなのでしょうね。同じ使命の者として」

最後は小声だったので聞き取れなかったけど、同じ剣術を修める者というだけじゃなく、なにかもっと違う繋がりのようなものを感じている。

別に惚れたとかそういう感じじゃなくて、家族みたいな雰囲気があるんだよな……。

「ミカツチさんの……………」

故郷はどういう場所なのか、訊こうとしてしまった。思わず言葉を止めるが、途中まで出た言葉はどうしようもない。

「はい、なんでしょうか」

「いえ、訊いちゃいけない事を訊こうとしてしまいました。すみません」

「そうですか。この国にいる事ができなくなるのは困りますものね。わたしには、もうここしかいる場所がありませんから」

ミカツチさんは俯いて呟く。

ここしかいる場所がない。

そういえば、この国に住んでいる人たちは、それぞれ事情は違えど、ここ以外に住む場所がない人たちなんだっけ。

あまりに普通で、あまりに平和な国だから、そういう事を忘れていた。

なにより、俺たちがここに居続ける目的は、他の人とは明らかに違うわけだし。

って、なんだか暗い話になってしまったな。

なんだか場の空気が重い。

「そういえば、ミカツチさんの修行のお蔭で、絶好調なんですよ」

「そうですか。といいましても、わたしが行ったのは、ファイさんの潜在的な力を引き出したただけですから」

「でも、それがすごいじゃないですか。あんな力があつたなんて、俺にだってわかりませんでしたから」

「人はそれぞれ、多くの力を引き出せずに生活しています。わたしやファイさんだけでなく、全ての人がその力を引き出せば、今とは異なる世界になるでしょう」

「全ての人が……」

確かに、人間は潜在能力の数パーセントしか出せていないらしいけど、そういうものなのかな？

「自然とその力を引き出せる人もいる様ですが、それはほんの一握りの人ですね。多くの人は、それすらも知らぬままでしょう」

自然にそれができる人ね……。オリンピックとかに出るような人とか、すっげえ武術の達人とかかな。でも、武術の達人だったら、こういう修行を知っていたりするかもしれないな。

「とにかく、俺はミカツチさんに出会えてよかったです。……なんて言うと、別れの挨拶みたいですね。まだまだ、教えて欲しい事や、鍛えてもらいたい事があるから、これからもお願いしたいんですけど」

「はい、こちらこそ。ファイさんが護(まも)ろうとするものがあるのでしたら、そのお手伝いをさせていただきます」

「お願いします。まだこの程度じゃ、俺は大切なものを護れない。ただの足手まといになっちゃう。だから、もっと強くなりたい」

ぐっと拳を握る。

もっともっと強くなれないと、蟲(ベステート)を相手にする事はできない。蜘蛛(アラネーオ)のサポートすらままならない。

その上でもっと精神的にも強くなれないと、風伯に見限られる可能性だってある。

「今日はゆっくり休んで下さい。無理をすれば、成長を阻害する事になります」

「はい。自主トレはやめておきます」

「……ええ、あれ以上の事はしない様をお願いします」

本当だったら、自主トレをしまくるんだけど、ミカツチさんがここまで言うなら、絶対にしないと決めている。

俺だって、自分で成長の芽を摘み取りたくない。そんな事をするのは、ただの愚か者だ。

それに、ミカツチさんの修行で、かなり疲れてるから、それ以上をする余裕がないんだよな。

「あら、もうこんな所まで来ていたのですね」

「あ、本当だ」

話に夢中になりすぎていたらしく、気が付くと、目の前にはミカツチさんの道場があった。

飲食街からは、それなりの距離があるのに。それもこれも、体が軽いせいなのか？ それとも、単純に話に集中しすぎてただけだろうか。

おそらくは両方だろうな。

「それでは、また明日。ファイさんは、早くシータさんの所に戻ってあげてください。もっとも、わたしが引き留めてしまったのですが」

「いえいえ、俺の方こそ付き合わせてしまって……。とても楽しかったですよ」

「そうですか。わたしとしましては、この国の規則がなければ、ファイさんの故郷のお話を、是非とも窺いたかったのですが……」

「残念ですけど、ミカツチさんもここにいられなくなっちゃいますもんね」

「はい。ですので残念です」

その願いは、この国にいる限り叶わない。

でも、その決まりがもし蟲(ベステート)の影響によるものだとしたら……って、そりゃないだらうな。

だけど、それが唯一の可能性であり希望かもな。

「それでは、おやすみなさい。また明日もよろしくお願いします」

「はい。ゆっくり休んで下さい」

挨拶をして、俺は来た道を引き返して、キヨカが待っている部屋へ向かう。

戻ってくると、キヨカは熟睡してやがった。

「これはこれでどうなんだろうな」

翌朝、キヨカは既に起きていた。

「おっはよ、ファイ。今日もいい天気だよ」

「……んあ？」

どうしたんだ、このテンションの高さは。っていうか、まだ時間は大丈夫だろう。正確な時間はわからなくても、毎日の生活リズムは一緒なのでなんとなくわかる。普段よりも早い。

「もうちょっと寝かせろよ」

「早起きはなんとかって言うでしょ。ほら、早く起きた起きた」

ホントになんなんだよ。

「いい天気の日、外で太陽を浴びないと」

……なにをわけのわからん事を。いや、それは重要なかもしれないけどさ。

「とにかく、俺はもうちょっと寝たいんだ。休息も立派な修行だっつての」

「そんな言い訳は通用しないよ。ファイは、もっともっと鍛えるんでしょ」

「そのためにも、休息が必要な。ミカツチさんにも、ゆっくり休めって言われてるんだから」

「……なんと。師匠の言葉なら仕方ないか。もちろん、それが本当だったら、だけど」

「本当だ」

まあ、おおまかには嘘じゃない。

「じゃあ、わたしは先に行ってるね」

そう言うと、キヨカは本当にすぐに出掛けていった。

「あいつ、ハリキリ過ぎじゃないか？ 昨日はかなり凹んでたのにさ。でもまあ、こっちの方が、らしいっちゃらしいけど」

さてと、俺はもう一眠りしますか。

……って、そんな余裕もないか。二度寝すると、今度は遅れそうだな。

「しょうがない。俺もゆっくりと準備するか」

キヨカのせいで、俺も早めに出掛ける事になりそうだ。

ゆっくり朝ご飯を食べれると考えたら、三文の得なのかな。

朝食を済ませて、ミカツチさんの道場へ向かう。

今日もがっつり修行するぞ。

ミカツチさんのお蔭で、かなり強くなれたけど、まだまだだもんな。

ここで満足せずに、もっともっと上を目指すんだ。

やる気満々で道場に到着すると、既に中からはミカツチさんの声が聞こえてくる。

「毎日、いつから始めてるんだらう？」

じいさんも、かなり早朝……っていうか、ある意味じゃ深夜から修行してたよな。叩き起こされてつらかったのは忘れられない。

年寄りだから……と思ってたけど、そういうわけでもなさそうだ。

「おはようございます」

大きな声で挨拶をして中に入る。

「おはようございます、ファイさん」

にこやかな笑顔で迎えてくれる。

「おはようございます。今日もよろしくお願いします」

「こちらこそ、宜しくお願いします」

礼儀正しく挨拶を返してくれる。

そのせいか、妙に緊張するというか、キリッと身が引き締まるんだよな。

道場へ上がり、しっかりと準備運動をする。柔軟をしたりして、体を解(ほぐ)す。

「それでは、軽く走りましょうか」

「はい」

俺たちは、今日も走る事から始める。

「ちなみに、どのくらい走るんですか？」

「それは、その時の調子次第でしょうね」

「……………」

なんだか含みがある感じだけど、昨日の調子ならもっと走れるかもしれない。それに、距離がわかってしまうと、それだけで疲れるかもしれない。だったら、知らずに走って、最後に距離を知る方がいいかもな。

というわけで、俺たちは走り始めた。

ほんの最初こそはジョギング程度だったが、そこからが問題だ。

「はあ、はあ……」

昨日とは比較にならないペースだ。

ミカヅチさんの本気なのか？ これで本気じゃなかったら、どんなだよって感じだ。

既にマラソンってペースでもない。

一キロの全力疾走でもするかのようペースだ。

いや、それ以上かも。

短距離走でもしているみたいだ。

さすがにこのペースにはついていけない。

「ファイさん、もう少しゆっくりにしましょうか」

「……はあ、はあ。お、お願いします」

さすがにこのペースは無理。

「それでは、この程度でどうでしょう」

……………確かにペースダウンしたものの、それでもかなりのものだ。マラソン選手かってくらいだろ、これ。

さすがにフルマラソンじゃないだろうな。このペースで走れるのは、本職くらいだろう。

そんなペースで走っていると、距離もだけど、時間もわからなくなってくる。

色んな感覚がおかしい。

息もできないくらいになってきた頃、ようやく休憩となった。

「ご苦労様です」

そう言うミカツチさんは、微塵も疲れを見せていない。

さすがに汗は掻いているようだけど、まだまだ走れるみたいだ。

俺はというと……クールダウンをする前に、ダウンしてしまっていた。立っている事も座る事もできずに、地面に寝転がって空を見上げている。

きちんとしないと……とは思うものの、動けないんだからしょうがない。

膝はガクガクになっていて立てそうにない。

「まだ、あの速さは難しい様ですね」

「……………」

本当なら、こんな風に甘く見られている事に腹を立てるべきなんだろうけど、なにも言い返せない上に、事実そういう状態だ。こんな状態でなにを言っても説得力はない。

「ですが、ご自分でどう感じられましたか」

「どう、ですか？」

肩で息をしながら、ミカツチさんの顔を見る。

どうなんだろうな。

「今までは、とてもじゃないですけど、こんなに走れませんでした。それが、数日でこうなったのは驚きです」

もっとも、俺が目指しているのは、マラソンランナーじゃないからな。

走る事は体力向上の基本みたいなものだから、重要なのはわかってるつもりだ。もちろん、蟲(ベスト)と闘う時だって、常に全力疾走しているくらいの体力が必要だ。

だから、走れる事に越した事はない。

結果的に、マラソンランナーレベルになったとしても。

「そうですね。それだけ走る事が出来るようになった事は、ファイさんの潜在的なものが素晴らしかったという事です。わたしの修行についてきて下さる事は、ファイさんの鍛錬(たんれん)の結果でしょう。先程も、途中まででしたが、わたしと同じ速さで走る事が出来ていましたし」

「ありがとうございます」

あのペースは異常だったけどな。

「ちなみにですが、ここままで三里と少しといったところでしょうか。最初の速さは半里程でしたね」

半里……？

って事は、あの異常なペースで二キロは走ったって事なのか？ 時間にすれば、ものの五分くらいか。

後から考えれば、たったの五分かもしれないけど、実際はそんな感覚じゃないからな。

っていうか、俺ってその程度の時間しか、ミカツチさんのペースについていけなかったのか。

こんなんじゃダメだな。

やっぱり、ミカツチさんと対等になるうなんてのは、まだまだ早い。ミカツチさんレベルは、まだ雲の上だな。

「それでは、休憩しましたら、再び走りましょうか。今日は、日暮れまで走りましょう」

「……………」

マジで？

一日中走るってのか。いったい、どれくらいを走る事になるのかを考えるとげんなりしてくる

。

「重要な事ですよ」

それが顔に出てたんだろうな、さらっと窘められてしまう。

休憩を挟んで、再びダッシュ！

今度は長距離マラソンじゃなく、短距離の連続ダッシュだった。

何度も何度も一〇〇メートルくらいを往復する。

なんだか、完全に運動部の練習っぽい。これはこれできついなよな。

それをもう何本こなしたかわからない。ひたすら走り続けている。

「はあ、はあ、はあ……」

「どうですか？」

「足が、足が……」

太股がパンパンになってきている。膝もそろそろやばい。

このままだと、帰れるかも不安だ。立っているのが精一杯だけど、今倒れたら二度と立ち上がれないかもしれない。

そんな俺を見て、ミカツチさんはふふふっと笑っている。

うわあ〜、すげえ恥ずかしい。でも、これが現状だよな。っていうかさ、あれだけ走れば誰だってこうなるって。

どんなきついシゴキなんだよ。

これは、今までで一番のきつさかもしれない。

「まだ、体力は残しておいて下さいね。帰りも走りますので」

「……………」

だよなあ。

帰りもそりゃ走るよな。

ここまでどのくらいだっけ？ 確か三里って言ってたよな。

三里って一ニキロ？ そんな距離をこれから走るのか。それも、ジョギングなんてスピードじゃないよな。まあ、そのスピードでも、その距離はかなりきついなけど。

往復でハーフマラソンってどこか。ただし距離だけな。

「さあ、もう少し頑張りましょう」

事も無げに言ってくれる。

じいさんのしごきもどうかと思ってたけど、ミカツチさんもなかなかのものだ。なまじ体が動くようになっただけに、このペースは厳しいぞ。

結局、短距離ダッシュは太陽がかなり傾くまで続いた。そして――

「嘘だろ……」

散々走った後に、三里の猛スピードマラソンだ。

「早く帰らないと、日が暮れてしまいますよ」

「……………」

言葉が出ない。

っていうか、それを狙ってたとしか思えない。

実際、かなり日が傾いてきている。本当に早く帰らないと、真っ暗になってしまうだろう。

元の世界なら街灯があるから、夜でもなんとかかなるんだが、ここはそういうものがない。

日が暮れてしまえば暗闇だ。

強いて灯りを探すなら、星がそうなるんだろうな。

そうならないためにも、早く道場に着かないといけない。飲食街や住居街なら、まだ灯りはある。

「急ぎますよ」

そう言って、またペースを上げられる。

やばい。これ以上はついていけそうにない。

今でもギリギリの限界だったのに、これ以上は……。

おえっと吐き気が。

内蔵がぐちゃぐちゃになっている感じだ。

これ以上は……ホントに無理。

「ファイさん、その苦しさを乗り越えて下さい。その先に、さらなる高みがありますから」

これを越える？

いやいや、体が動かないって。これ以上は拷問だよ。

「ミカツチさん、もう……」

「諦めないで下さい。自分の力を信じて下さい。ファイさんなら、乗り越えられるはずです」

「……………」

言葉だけなら嬉しい内容なんだけど、いかんせんこの状況じゃな……。

確かに強くなりたい。

だから、今のこの壁をぶち壊したい。壊した先にあるなにかを掴みたい。それを自分のものにしたい。

「くっ……」

そのためには、今を我慢ってか。

とんだ体育会系のノリだよな。

崩れそうになる膝にもう一度力を込める。

止まるな。

止まるとそこで終わりだ。

前へ。

一歩でも前へ。

ゆっくりと足を進めていく。

とても走れる状態じゃない。

それでも、止まるわけにはいかない。

「動け。もっとだ。もっと。……もっと動けえっ！」

ここまできたら、気合いと根性でなんとかかしてやる。

俺の体との根比べだ。

体が壊れるか、心が折れるか。

すっげえ自虐的なのとか、自分虐(いじめ)めをしてるといとか……って、一緒だよな、これ。

とにかく、自分との勝負だ。

俺は上を目指さないといけない。

少しでも早く強くなりたい。

「だったら、ここで決めるべきだろ。そう思うよな、俺」

折れてしまいそうな心に喝(かつ)を入れる。

ここで負けるわけにはいかねえんだよ！

「ファイさん……」

持ちこたえろよ、俺の体。こんくらいで、へばるんじゃねえぞ。

絶対に越えてやる。

この限界を超えて、蟲(ベステート)と渡り合えるくらいまでになってやる。

絶対、蟲(ベステート)に勝つんだ！

こんな事で負けるわけにはいかねえんだ！

残っている力よ、全部使いきってやる。全部絞り出してやる。

俺の中の力よ、集まってきやがれ。

まだ立てる。

まだ走れる。

まだ先へ行ける。

まだ乗り越えられる。

まだ……まだ……ま……だ……だ……

道場へ到着した時には、既に日は暮れていた。辺りは真っ暗でなにも見えない。

「すみません」

俺は、ミカヅチさんに肩を借りて、ようやく歩ける状態だった。

「大丈夫ですか？」

ミカヅチさんは心配そうに言ってくれる。表情が見えないのが、ちょっと残念だ。きっと、心配そうな顔で優しく見ているんだろうな。そのはずが、仮面のせいで、四つ目の蛙っぽい顔にしか見えない。

よたよたと歩きながら、なんとか道場の中に入ると、そこには誰かが寝ていた。

「っ！」

ミカツチさんは、俺を支えたまま臨戦態勢に入る。今は竹刀もなければ俺を支えたままなので、片手を構えるだけだ。ミカツチさんの体術の腕前は知らないけど、剣術があればできるなら、暴漢相手くらいはできるだろう。

俺もなんとかしたかったが、動けないので、せめて邪魔にならないようにしようと、ミカツチさんから少しでも離れようとする。

といっても、床に寝そべって、そのまま転がるしかできないんだけど。

「誰ですか」

道場の中は暗く、灯りと呼べるものは、強いて挙げれば、星の光くらいだろう。その程度の灯りでは、相手の様子がわからない。ただわかるのは、寝ころんでいる事だけだ。

ミカツチさんは、警戒したまま、じりじりとにじり寄っていく。

「起きなさい！ 何者ですか！」

完全にミカツチさんの間合いだ。一步踏み出せば、確実に当てられる。

「ん？ むにゃむにゃ」

寝ていた何者かは、その声で目を覚ましたようだ。

それにしても、道場に忍び込んで眠ってるなんて、いったいどんなヤツなんだ？

そいつは、ゆっくりと体を起こす。

その動きに注意して、ミカツチさんはいつでも攻撃できる体勢だ。少しでも不審な動きをすれば、ミカツチさんの一撃が決まるだろう。

「.....あれ？ 真っ暗？」

そいつは寝惚(ねぼ)けているのか、ぐらぐらと頭を動かし、周囲を見ている。

「もしかして、寝ちゃってました？」

なんて暢気(のんき)なんだ。

勝手に侵入しておいて、しかも寝ているなんて、ふてぶてしすぎるだろ。

「動かないで」

凜とした声が道場に響く。その声に反応して、そいつは体をビクンとさせて固まる。

「あ、あの.....私.....えっと.....」

ゆっくりと両手を挙げながら、しどろもどろでなにかを言おうとする。

「あなたは何者？」

「えっと.....私は.....ファイに会いに.....」

ん？ ファイって俺だよな。

俺の事を知っている？

.....って、ちょっと待て。

この声ってもしかして。いや、もしかしなくても、

「シータか」

「ファイ？」

どうやらキヨカで間違いなさそうだ。

キヨカも暗くて相手がわからなかったんだろう。俺の声を聞いて安心したのか、泣きそうな声だ。

「シータさん？ 確か、ファイさんの……」

「ファイ？ どこ？ 暗くて……って、そこ？」

シータは俺を見つけたようだ。

ミカツチさんは既に警戒を解いていた。

「ここだ、ここ。っていうか、なんでここにいるんだよ」

まあ、遅くなって心配してってとこなんだろうけどな。

それにしたって、道場で寝てるなんてどうしたものか。

しかも、勝手に上がり込んでるし。

でもまあ、キヨカならその程度はするかもな。

「それにしても驚きました」

蠟燭(ろうそく)の明かりを囲んで座っていた。夜間の灯りはこれだけらしい。

「私もびっくりですよ」

「莫迦(ばか)。驚いたのはこっちだったの。帰ってきたら、誰かが道場の真ん中で寝てるんだぞ」

「……いつの間に寝ちゃったんだろうね」

キヨカはてへりと頭に手をやる。

「すみません。勝手にこいつが上がり込んで……」

不法侵入だろうが、どう考えても。この国の法律にそういう項目があるのか知らないけど。

「ごめんなさい」

「いえいえ、構いませんよ。この道場は施錠しておりませんので、用のある方はご自由にお入り
いた

だけです」

まあ、田舎の家ならそういう事は多々あるけど、少し人が多い町だとそうはいかないよな。都
会な

んて、鍵もかけずになんて、信じられないだろう。ましてや、隣人が勝手に上がり込んでるなん
てな

。

キヨカに関しては、どちらかといえば田舎感覚だから、その辺は結構自由なんだろうな。

「それでも、こんな事になっちゃって……」

「本当に気にしないで下さい」

「ほれ、シータも」

「ごめんなさい」

「シータさんも、気になさらないで下さい」

ったく……。

こんな騒ぎを起こすなんてな……。

「シータさんは、ファイさんを迎えに来られたんですよね」

「そのですね……」

ミカヅチさんの言葉に、キヨカはゆっくりと言葉を紡ぐ。

「実は、お昼過ぎに来て、ファイの様子を見ようとしたんですけど、ここには誰もいなくて、そ
れで

ちょっと久しぶりに体を動かして、それでも帰って来なくて。暇だな……と思ってたら、寝てた
みた

いです」

マジか。

呆れて言葉がないな。

「それは申し訳ありませんでした。本日は野外で修行をしていたものですから」

「そうなんですか」

キヨカがこっちを凝視する。

何故睨む？

「野外か……。っていうか、そういえばファイはどうしてさっきから寝てるの？」

「走りすぎて動けないんだよ」

「へっ？」

理由を言うと、キヨカは間抜けな声を出した。

「だから、修行で走ってたんだけど、走りすぎて足が痛くて動けないんだ」

「……莫迦？」

キヨカに言われたくない。

「ファイって、そういうのばっかだよ。修行したら、すぐに動けなくなるよね」

「……………」

否定はできない。

オーバーワークが過ぎるのか、俺の体がそれくらい耐性がないのか、動けなる事しばしばだ。

「本日は、わたしの調整不足でした。ファイさんならもう少し走れるかと思ったのですが……」

ショックだ。どうやら俺は、ミカツチさんの期待には応えられなかったようだ。ミカツチさんはも

っとできると期待してくれてたのに、俺の実力はそこにも到達してなかったって事か。

「もっとも、限界を超えて走って頂くつもりでしたので、このくらいにしなければいけなかったの

です」

今日は限界突破で、壁の先へ行こうとしていたわけだよな。だったら、まだ走れてるようじゃ、不

足って事だよな。

……でも、もっと走れるっていうか、もっとできるって期待してくれてたものには、応えられてな

いんだよな……。

結局、俺はまだまだって事だ。

「そうなんですか。ところで、ファイって見込みありますか？」

おいおい、そんな質問はやめてくれ。これで、ないなんて言われたら、俺はもう立ち直れないぞ。

「もちろん、見込みはあります。その点では、わたし以上だと思います」

「ミカツチさん以上？ これです？」

キヨカの視線が痛い。

「もちろん、今はまだかもしれませんが、ファイさんの成長は、わたしの時よりも遙かに優れていま

す。この調子で続ける事が出来れば、ファイさんはわたしよりも強くなるでしょう」

よかった……。

でも、ミカツチさん以上ってのは、自分でも想像できないんだよな。

「それって、お世辞じゃないですか？ どう考えても、ファイが……。まあ、ファイだって、その辺

の人と比べたら、断然強いんですけど、それでも……信じられないです」

キヨカ、素直に信じてくれよ。ってというか、キヨカの俺に対する評価って低いよな。

「シータさんが信じてあげて下さい。ファイさんは、まだまだ伸びます。この先、いかなる相手でも

倒せる程に。なにしろ、伝説の四刀が認めた使い手ですから」

「……まあ、そうなってもらわないと困るんだけど」

なんだか腑に落ちない感じだな。

だけど、俺だって風伯に認められたわけだからな。きちんと役目は果たすぜ。

……でも、なんだろう？ なにかが引っかかる。まあ、たいした事じゃないんだろうけど、なんだ

ろうな。でも、わからないくらいならどうでもいいか。

「で。ファイはいつまでそのままなわけ？」

「……………すまん。足がガクガクで立てないんだ」

キヨカは盛大なため息を吐く。

「本当にこんなので、強くなれるのかな……。まあ、ミカツチさんの修行はいいんだろうけど、ファ

イがついていけないよね。……って、ふと思ったんだけどさ、ファイって歩けない状態なのに、ど

うやってここに戻ってきたわけ？」

「そんなの、ミカツチさんに肩を借りてだな……」

「ちょっ、なにしてんの。ってというか、なに考えてるのさ」

「うげっ」

動けない俺の脇腹に、キヨカの手刀が決まる。

「がはっ、お、お前、なにしやがるんだ」

「なんか、すっごくムカっとしたから」

「なんだ、それ。どんな理由だよ」

「正当な理由だよ」

キヨカは、つんとそっぽを向く。

なんだ、この仕打ちは。全然納得できないんだけど。どうして、俺がこんな目に？

「ファイってば、ミカツチさんに迷惑掛けちゃダメだよ」

「……………すみませんでした」

とにかく謝っておこう。なにに対してなのかはわからないんだけど。

「シータさん。ファイさんを宿まで連れていけますか？ それとも、動けない様でしたら、この道

場にお泊まり頂いても構いませんが」

「そうですね……」

キヨカは俺をじっと見て、

「ここに泊めてもらおうか、ファイ」

「俺はどっちでも……」

「ファイを運んだら、私が疲れるし大変だし、面倒じゃない。どうせ用事なんてないんだし、ここに

泊めてくれるっていうなら、その方がいいんじゃないかな。明日も修行するんでしょ。……まあ、動

けたらだろうけど」

「うっ……」

なんだか色々痛い。

「わかりました。それでは、寝床の用意をしましょうか」

「そうですね……って、その前に、ご飯にしませんか？ もしかして、二人とも済ませちゃってる？

」

そういや、なにも食べてなかったな。あまりに疲れすぎて、食欲があまりないんだけど。

「そうですね。すっかり失念しておりました。夕餉(ゆうげ)の準備を致します」

「あっ、えっと、私も手伝います」

ミカツチさんが支度をしようとして立ち上がると、キヨカは慌ててそれを追いかける。

そして――俺は動けなかった。

食事を終えて、床につく事になったわけだが……。

なんだろうな、妙な緊張感だ。

ミカツチさんが布団を敷いてくれて、俺たちはそれぞれの布団に寝ている。

道場に布団を敷いて寝るなんて、部活の合宿……でも、こういうのはないのかな。部活経験がない

から知らないけど。でも、そういう合宿っぽい感じがしていいよな。

最初は、俺だけ離れて寝れば問題ないかと思ったけど、ミカツチさんは三枚の布団を並べて敷いて

くれた。

別に疚しい気持ちはないんだけど、こういうのってどうなんだろうな。

で、そうなるはどこに誰が寝るかって事で問題になるよな。

まあ、普通に考えれば、俺がどちらかの端でいいわけだ。結果的にそうなった。

で、真ん中はキヨカ。俺の反対側がミカツチさんだ。

無難なポジションだと思う。これ以外だと、なにかと問題になりかねない。

それはまあいいとして、なんだか隣に寝ているキヨカが変なんだよな。それが緊張感の理由だろうな。

「ねえ、ファイ」

小声でキヨカが話し掛けてきた。

「ん？ なんだ？」

「……ううん、なんでもない」

「なんだよ、気になるだろ」

「ごめん。本当になんでもないから」

そう言って、キヨカは反対を向いた。

なんだってんだ？

とにかく、ゆっくり寝よう。変な感じだけど、疲れてるからな。

目を閉じると、ずっと眠りに入る事ができた。

「……………ん。んげっ」

急に苦しくなって目が覚めた。

なんだか、首が……。息が……。

ん？ なんだ、これは。なにかが絡みついて……って、これは誰かの手だ。

「シータ」

こんな事をするのは、キヨカくらいだ。

「むにゃむにゃ……」

手の主を見ると、案の定だった。どう考えてもミカツチさんじゃないだろうからな。

「おい、どけてくれって」

キヨカの手を払いのけようとするが、しっかりと力を込めているらしく動かない。

寝起きで、息もしづらく……力が入らない。

「シータ。起きろよ。でもって、手をどけてくれ」

なんとか手を外そうと動くと、キヨカはぎゅっとしがみついてきた。

……解放されるどころか、悪化してしまった。

なんとかしようとするほど、キヨカはぎゅっとしがみついてくる。

「ファイさん、お目覚めですか。おはようございます」

俺が騒いだせいか、ミカツチさんが目を覚ましてしまったらしい。

「すみません。起こしちゃいましたか」

むしろ、キヨカを起こしたいんだけどな。

「いえ、問題ありませんよ。普段もこのくらは起きていますから」

それを聞いて安心するが……外はまだ暗い。深夜とまではいかないまでも、四時とか五時くらいだ

ろうか。そろそろ、空が白んでくる頃だろうか。

普段は熟睡してる時間だからな……よくわからない。

「あらあら、大変なご様子ですね」

ミカヅチさんは、微笑ましく俺の様子を見ている。

「シータ、起きろっての」

ミカヅチさんに見られてると、苦しさに加えて羞恥が……。本当に勘弁してくれよな。

ミカヅチさんは、そんな俺を放置して、竹刀を手に道場を出ていく。どうやら、外で素振りでもするようだ。

……………さて、俺はどうしたものか。

こいつ、本当に寝てるんだらうな。

ここまでしがみつかれてると、逆に怪しく思えてくる。しかし、俺に確かめる術がない。

くすぐってみるのも手なんだらうけど、そうするとキヨカがあらぬ発想を展開させるだらうからな

。その状態は、それから体感時間で三〇分くらい続いた。

結果的に、キヨカが目を覚まして俺は解放された。

その頃には、空は明るくなってきていた。

キヨカから解放されて外に出ると、ミカヅチさんはやっぱり素振りをしていた。

「おはようございます、ミカヅチさん」

改めて挨拶をする。

「おはようございます。どうやら、解放された様ですね」

さすがのミカヅチさんも笑いを堪えられないらしい。

「本当に災難でしたよ」

俺はミカヅチさんの横に並んで風伯を振る。

「朝早くからって、気持ちいいですね」

「そうですね。やはり、この早朝の空気は気持ちがいいです」

澄んでいるというのもあるんだらうけど、ぴりっと引き締まる感じがする。ほんのり肌寒いってのもあるのかも。

「体の調子はいかがですか？」

「はい。順調です」

「そうですか。昨日の疲れはもうない様ですね」

「……あっ、そういえば」

昨日は動けないほどだったんだ。

すっかり忘れていた。

というのも、今はどこも痛くない。

筋肉痛になっているわけでもない。

あれだけ走った後なら、筋肉痛で足が動かないって事もあるはずなのに、特になにも感じない

。

「少しでも壁を越えられている様ですね」

それって、限界を突破したって事なのか？

俺自身、なにか変わった感じはない。

ただ、あんな状態だったのに、なにもなかったみたいに普通だ。……でも、よく考えれば、それが

おかしいんだ。こんな一晩で回復するなんて、今までなかった。もしかして、しばらく経ってから

るのかもしれないけど、ミカツチさんの言い方だと、そういうのはなさそうだ。やっぱり、修行の成

果なのかな。

「やはり、ファイさんには素質がありますね」

ミカツチさんは、にこやかに笑いながら言う。

この人はお世辞で人を褒める事はないだろうというのはわかる。これも本心なんだろう。

褒められて悪い気はしない。むしろ、ミカツチさんに褒められるのは嬉しい。認められてるって事だから。

だけど、やっぱり俺には実感がない。俺がそんな風に認められるってのが、理解できない。自分を

過小評価してるだけなんだろうか。それとも、ミカツチさんが俺を過大評価してるのだろうか。

ミカ

ツチさんの見立ては確かだろうし……やっぱりそうなのかな。

かといって、素直に受け入れられないんだよな。ひねくれてるかな。

でも、受け入れたら受け入れたで、天狗になってしまうだけのような気もする。だったら、今のま

までいいのかな。

「今日も基礎体力を向上させる修行をしましょうか」

俺がしんみりと考えていると、ミカツチさんがそんな事を言う。

なんだか不穏当な感じがする。自然と背筋が寒くなる。

「は、はい。頑張ります」

自然と身が引き締まる。今日はどんな事をするんだろう。基礎体力向上って事は、やっぱり走り込

みなのか？

「とにかく、まずは早朝の素振りをしておきましょう。今日は、刀に触る事はないでしょうから

」

「……はい」

やっぱり走り込みかな。

だったら、なおさら今に集中しておこう。

風伯を振れるのは今だけみたいだし。

翌日も早朝から風伯を振る。ミカツチさんは、俺よりも早く起きて素振りをしていた。

「おはようございます」

「ファイさん、おはようございます」

ミカツチさんって、いつくらいから素振りをしてるんだろう。今日は、結構早く起きたつもりだっ

たんだけどな……。

そうしていると、キヨカが目を擦りながら出てきた。

「ん？ みんなもう起きてるんだ」

「シータさん、おはようございます」

「おふぁようございます」

キヨカは欠伸をしながら答える。

「シータ、どうしたんだ？」

いつもならまだ寝ている時間だ。

「ファイ、起こしてくれればいいのに……。今日から私もするって言ったでしょ」

どうやら、早朝練習からきちんとするつもりだったようだ。

「そりゃ悪かったな。でも、自分で起きろよな」

「……無理だよお。ファイと違って、早起きは慣れてないもん」

「じゃあ慣れろ」

「無茶苦茶だよお」

そう言いつつ、キヨカは竹刀を持ってきて、一緒に素振りを始める。

「本当に仲がよろしいんですね」

ミカツチさんは、俺たちのやり取りを見て笑みを浮かべる。

なんだか恥ずかしいな……。

「ミカツチさん、今日から私も教えてもらっていいですか？」

キヨカが唐突に話し出す。

「はい。もちろんです」

もしかしたら、昨日の事があって予想していたのかもしれない。快く了承してくれた。

「やったよ、ファイ」

「本当にいいんですか？」

断らないとは思うけど、迷惑じゃないだろうか。

「いえ、問題ありませんよ。むしろ、楽しなってきます。今まで一人でしたから、こうしてみなさん

と一緒に修練出来るなんて、夢の様です」

まあ、喜んでくれてるみたいだからいいか。

「それでは、今日はシータさんも一緒に出来る様、道場内で出来る事にしましょうか」

.....風伯を振れるならいいんだけどな。昨日みたいに、筋トレ三昧って事もあるよな.....。

「それでは、早朝修練を終えましたら、朝食にしましょうか」

そう言ってから、みっちり三〇分は素振りをした。

朝食を食べ、道場に立つと準備運動。

きっちりとストレッチをしておく。

「それでは、本日は久しぶりに模擬試合をしてみましようか」

なんと、試合形式でできるなんて。

基礎がイヤってわけでもないんだけど、やっぱり楽しいのはこっちだよな。

素振りはしてても、実際の手合わせはないから、実力がどうなったかわからない。もっとも、そんな

な数日でここから成長しているとは思えないんだけど。

「じゃあ、まずは私とファイがしますね」

えっ？

最初はキヨカなのか。

「そうですね。幾度か試合形式で行う予定ですので、どなたからでも結構ですよ」

それなら、できるだけミカツチさんと手合わせしたいところなんだが.....まあいいか。

「ファイ、手加減しないからね」

「ああ」

そういうわけで、俺たちは竹刀を持って向かい合う。お互いに正眼に構える。さすがに剣道の防具

はない。部分的に保護するようなものがあるだけだ。それも胴回りだけ。頭に関しては.....仮面があ

るから大丈夫なのか？ とにかく、本気で振らない方がいいかもしれないな。

「それでは、始めっ！」

ミカツチさんの合図で、俺たちは同時に竹刀を振り下ろす。と同時に距離をとる。

互いに牽制だ。

そのまま間合いをはかりながら、動きを止める事なく円を描くようにに移動する。

こいつ、隙がないな。

さすが経験者ってところか。

さっさと終わらせようと思ったけど、こりゃ長引くかもしれないな。

だからって、キヨカ相手に防戦一方っていうのは、俺のプライドが赦さない。そんなの認めるわけ

にはいかないんだ。

俺はこの前までの俺じゃない。

本気で竹刀を振れないとか、そんな事を言ってる場合じゃないな。本気でやらないと負ける。

牽制で幾度か振りながらチャンスを待つ。

キヨカの腕前は認めるが、ミカツチさんほどじゃない。素人よりは、ちょっと強いくらいだ。
その
程度なら、俺が勝てるだろう。

「胴っ！」

「っ！」

.....なんだ？

なにが起こった？

「勝負あり」

ミカツチさんが、そんな事を宣言する。

「.....えっ？」

「やったあっ！ ファイに勝っちゃった」

キヨカがぴよんぴよんと跳ねている。

どうなったんだ？

「ファイ、油断大敵だよ。私だってやる時はやるんだからね」

へっ？

あれ？

まだ状況が理解できない。

「.....俺、負けたのか？」

防具のお蔭で痛みはない。そのせいか、どうも実感がない。

「シータさん、お見事でした。ファイさんの一瞬の間をつきましたね」

ミカツチさんが絶賛している。

「ファイ、まだまだだね。現実を受け入れなさい」

事実、勝利したキヨカは、勝ち誇って胸を張る。

俺はこんなヤツに負けたのか。

すげえショックだ。

「ファイさんは、相手がシータさんだと油断された様ですね。どの様な相手であれ、油断は禁物
です

」

「.....はい」

力なく、そう言うだけで精一杯だった。

「じゃあ、勝利した私が、ミカツチさんに挑もうかな。ラスボス戦だね」

「それでは、お手合わせお願いします」

茫然自失の俺は、キヨカに押されて隅っこに。

中央では、キヨカとミカツチさんが、竹刀を構えて向かい合っている。

「ファイ、合図お願いね」

「宜しくお願いします」

どうしてこうなったんだろう？

本当なら、俺とミカツチさんがあそこにいるんじゃないのか？

「始め」

そう合図したものの、全く声に力がない。

ミカツチさんは、キヨカの腕を試すために、わざと攻撃を受け続けている。

キヨカもそれがわかっていて、全力で打ち込んでいる。

ああ、なんだか楽しそうだな……。

俺だって、あんな風に打ち合いをしたい。

キヨカは何度も何度も打ち込んでいる。その全てを、ミカツチさんは竹刀で受けている。避ける事

をしていない。

キヨカの太刀筋が素直だってのもあるんだろう。あいつの太刀筋は、フェイントって言葉を知らな

いんじゃないかってくらい純粹だ。

勝負というよりも、この立ち会いを楽しんでいるからだろう。

ああ、羨ましいな……。

俺だって、もっと純粹に楽しめばよかったのかな。

そうだよな。よく考えれば、試合形式の練習だよな。勝敗を競うわけじゃない。

負けたからって、ミカツチさんと手合わせできないわけじゃないんだ。

だったら、こんな事で落ち込んでてもしょうがない。

そんな暇があるなら、ミカツチさんの動きを見ていないと。

その動きから、ミカツチさんの強さを盗まないといけない。

キヨカのビギナーズラックなんかには拘る必要はないんだ。

これを教訓にして、油断しなくなればいいだけの事。

頭を切り替える。

今は目の前に集中だ。

じっと身を乗り出すように見ていると、一瞬だけミカツチさんがこっちを見て、笑みを浮かべた気

がした。気のせいかな。

ミカツチさんはキヨカの竹刀を受けながら、ゆっくりとキヨカを追い詰めていっている。キヨカ

の息が徐々に荒くなっていく。

そりゃ、今まで鍛えてなかったもんな。

体力の限界だろう。

体育会系程度の体力はあっても、その程度じゃミカツチさんと渡り合う事はできない。

そろそろ終わりだろうな。

ミカツチさんが、それに気付いていないわけがない。キヨカは、自分の状態を把握してるんだ

ろう

か。

どちらにせよ、もうすぐ終わる。

そういう状況でも、キヨカは攻撃の手をゆるめない。むしろ、自棄になってるんじゃないかと思えるくらいだ。

打ち込みが強くなっていつている。

あいつ、こんなに動けたんだ。

思わず感心してしまう。これだけできるなら、俺が油断して負けるのは納得だ。

過小評価をしていた俺が悪い。

そんなキヨカの攻撃も、そろそろ本当に限界だろう。膝が震えている。足が追いついていない。竹

刀を握る手もブレてきている。おそらく、握力がなくなっているんだろう。

そうになったら終わりは早かった。

「お疲れ様です」

その言葉と同時に、キヨカの竹刀が落ちる。

「あっ」

キヨカは膝をついた。

「勝負あり」

俺の宣言を受け、ミカツチさんはキヨカの手を取って立ち上がらせる。

「とても素晴らしい腕前でした。わたしの想像以上でした。どうですか？ 本気で鍛えれば、ファイ

さんを超えるかもしれませんよ」

うっ……。

冗談なのか、本気なのか……俺としては、聞きたくなかった言葉だ。

俺を超える？

ミカツチさんがそう言うと、冗談に聞こえない。この人はお世辞なんて言わないだろう。だとした

ら、事実なんだろうな。

「はあ、はあ……ありがとうございます。でも、ファイが強くなってくれたらそれでいいんです」

「そうですね。ですが、自分の身を護る事が出来れば、ファイさんも心置きなく戦えるでしょう」

「……そうですね。じゃあ、程々で」

にっこりと笑顔で答えるキヨカに、ちょっとだけ嫉妬していた。

やっぱり、キヨカが本気になれば、俺なんかを軽く超えてしまうんだろう。

「それでは、次はファイさんですね」

あ、そうだ。次は俺の番なんだ。

今の試合に見入ってしまって、すっかり忘れていた。あんなにミカツチさんとの手合わせを望んでいたのにな。

「はい、お願いします」

竹刀を手に立ち上がる。

「ファイ、頑張ってるね」

「おうよ、任せとけ」

すれ違いざまに声を掛け合う。

さあ、やってやる。

ミカツチさん相手に油断はない。手を抜くなんて考えられないからな。そんな余裕があるはずない。

全力で立ち向かうしかないんだ。

さあ、俺を試す勝負だ。

「疲れた……」

ゆっくりと風呂に浸かって、今日一日の疲れを落とす。

「それにしてもハードだったよな……」

結局、一日中繰り返していた。

その間、ミカツチさんの竹刀捌きが乱れる事はなく、俺たちは全く敵わなかった。腕が上がりなく

なるくらい竹刀を振ってたけど、ミカツチさんはその後も素振りをしてたもんな。どこまでタフなん

だろう。

「さすがだよな」

追い詰めたつもりになった事は何回かあったものの、ミカツチさんに見事に返されてしまった。

「やっぱ、まだまだだな」

さすがに、こんな短期間で、ミカツチさんに追いつけるなんて思っていない。だけど、少しでも上達

できた事だけは確かだ。

「ああ～痛てっ」

腕がパンパンだ。こりゃ、筋肉痛確定だろうな。少しでも和らぐように、しっかりと揉み解してお

く。

こんなのが毎日続けば、そりゃ強くなるだろう。もっとも、素質あってこそだけど。

とにかく、充実してるよな……。

これだけしっかりと修行できるなんて、かなり恵まれているだろう。

じいさんの特訓もよかったけど、ミカツチさんほどの腕前の人に鍛えてもらえるなんて、恵まれず

ぎじゃないかな……。

ばしゃばしゃと顔を洗う。

「明日も頑張ろう」

風呂から上がると、既に夕食の準備が整っていた。

「なんだか、私たちって、ここに住んでるみたいだね」

食事中にキヨカがそんな事を口にして、俺たちはある事に気付いた。

「ねえ、ファイ」

「ああ、多分俺も同じ事を言おうとしてる」

見つめあって意見は一致した。

「あの部屋、どうしよう？」

「だよな。ずっとここにいたら、もったいないだけだよな」

そうなのだ。

ここで生活しているなら、あの部屋を借りている必要はない。無人の部屋を借り続けても意味はな

い。荷物置き場にしてるわけでもないからな。

「それでしたら、お二人も一緒に住んでしまいませんか」

と、ミカツチさんが提案してくれた事もあり、明日キヨカが部屋の解約に行く事になった。

俺も一緒に……と言ったけど、俺は修行の方が大事だって事になった。

翌日、キヨカが手続きを終え、俺たちはここに住み込む事になった。

それで思い切れたのか、単純にここでなら疲労で倒れてもなんとかなると思ったのか、ミカツチさ

んの修行は厳しさを増した気がする。

だけど、その方が俺にはありがたい。

できるだけ早く、できるだけ強くなりたいからな。

ひたすら修行をする日々が続き、この同居生活が始まって二〇日が経った。来る日も来る日もミカツチさんの特訓を耐えてきた。

キヨカもずっとその修行についてきている。俺よりは軽いメニューみたいだけど、それでもすごい

。「今日は久しぶりに、試合形式でしてみましようか」

「やったあっ！」

「よしっ」

ずっと続けていたけど、やっぱり手合わせしてみたい。でないと、実力がわからない。

もっとも、ミカツチさんに追いつくのは困難だってのはわかってる。

俺がいくら強くなっても、ミカツチさんも腕を上げていくわけだからな。そのペースを俺が超えな

いと、追いつく事はできないんだ。

「まずは、シータさんからしましょうか」

ちょっと残念だったが、キヨカがどれほどになったのか、確認してやろうじゃないか。

「お願いします」

キヨカは礼をして、道場の真ん中に立つ。

「お願いします」

ミカツチさんが向かいに立つ。

すごい緊張感だな……。

互いに正眼に構えた竹刀の先を合わせる。

キヨカは目を閉じて、集中しようとしている。

横で見えていても緊張するんだから、いざ向かい合うとどうなんだろうな。

命のやり取りはないけど、ここで今までの成果がわかるんだもんな。これだけしても成長してない

となると、この先が望めないかもしれない。

開始の合図だけのはずなのに、緊張して膝が震えてくる。武者震いじゃないよな、これ。興奮もし

てるけど、怖いんだ。この震えは恐怖だ。

「ファイ、いつでもいいよ」

目を開いたキヨカは、瞬きを忘れたようにミカツチさんを見る。

「ファイさん、いつでもどうぞ」

「は、はい」

どうやら、二人の準備はできたみたいだ。

っていうか、俺がこんなに緊張してどうするんだっての。

これから竹刀を交えるのは、キヨカとミカツチさんだ。

深呼吸をして落ち着こう。

「準備はいいですか」

二人が頷く。

「始めっ！」

俺の声と同時に、キヨカが打ち込んだ。

先手必勝って事か？

俺だったら、あの打ち込みは避けれてないかもしれない。だが、ミカツチさんはそれを体の軸をず

らして避けた。

キヨカは、それを読んでいたのか、そのまま竹刀を横に薙ぐ。

別に剣道の試合じゃないからいいんだけど、剣道じゃあり得ない光景だよな。

さすがに移動では避ける事ができず、ミカツチさんは瞬時に持ち変えた竹刀でそれを受けた。

すご

い判断力だ。

キヨカとしては、そこまでだったらしく、反撃を恐れてか、距離をとった。

「速攻を狙ったら勝てると思ったんだけどな……」

「先程の攻撃は、間一髪でした」

一瞬とはいえ、キヨカはミカツチさんを追い詰めたって事になるのか。

果たして、俺にそれができるだろうか。同じ攻撃は通用しないだろう。最初だからこそできた事だ

。速攻を失敗したキヨカは、そこからは慎重だった。

ひたすら様子見の攻撃を続けていく。

勝つための攻撃じゃなく、隙を見つけるための攻撃だ。

もちろん、腕試しだから勝敗は関係ないだろう。

だけど、そんなのは建前だ。

勝ちたいに決まってる。

誰が好き好んで負けるものか。

どうせなら勝ちたい。

そのせいだろう。キヨカの攻撃は精彩に欠ける。

自分の力を出し切るというよりも、なんとしても勝とうとする戦い方だ。もっとも、俺だって同じ

ようにするだろう。だから、これがズルいとか思わない。

でも、キヨカに勝たれると、それはそれで悔しい。

どうせなら、俺がミカツチさんに勝ちたい。

これでキヨカが勝って、俺が負けたりしたらどうするんだよ。

キヨカが負けてくれた方が、俺としては気が楽なんだよな。

なんて、そんな事を考えるなんて、地に落ちたもんだな。最低だ。大莫迦野郎だ。

きっちりと勝て。

そして、俺も勝ってやる。

ミカツチさんを超えるんだ。

その気持ちが伝わったのか、キヨカの動きが変わった。

様子を見ているだけだった攻撃を止め、勝ちを狙うようにひとつひとつの攻撃に集中している

。

その一撃一撃はどれも重く、ミカツチさんは本気を出して受け止めている。

今までのキヨカじゃない。

少し前までの――ミカツチさんに出会う前の俺よりも格段に強い。

キヨカにこれだけ強くなれたら、俺はもっともっと強くなれないと、キヨカを護ってやるなんて

言えないな。

普通に部活で試合をするレベルなら、申し分ない腕前だ。

キヨカはミカツチさんと何度も竹刀を合わせ押し合いになり、そうなれば距離をとって様子を見て

.....というのを繰り返す。

「そういえば、ミカツチさんって.....」

キヨカの成長に気を取られて気付かなかったが、ミカツチさんはまだ一度も攻撃をしていない

。

キヨカの攻撃を受けて、その流れを生かしてキヨカへの攻撃に転じるような事はあったけど、
純粹

な攻撃はまだ一度もない。

やっぱり、ミカツチさんはすごい。

この人に追いつくのは、とてもじゃないが無理だと思わされる。

だけど、それを超えるつもりじゃないと、とてもじゃないが蟲(ベステート)と渡り合えるとは思

えない。

キヨカは、竹刀を正眼に構えたまま、ミカツチさんの前で硬直している。

完全に手詰まりという事だろうか。もう、ミカツチさんの隙を狙うしかない。だけど、そんなもの

があるだろうか。

ほんのわずかな隙を狙う。それも、あるかどうかはわからないものだ。

だけど、キヨカにはそれしか勝つ方法はない。

「シータさん、相当腕を上げられましたね。わたしの想像以上です。これ程の腕前があれば、凄腕の

使い手が相手でも、自らの身を護る事は可能でしょう」

「ありがとうございます」

褒められても、キヨカはにこりとしなかった。それだけ集中しているようだ。いや、ミカツチさ

んにあれだけ太鼓判を押されたら、そりゃ嬉しいだろう。それでも変化がないってのは、キヨカはか

なりテンパっているみたいだな。そんな余裕はないってか。

この張り詰めた空気に、俺も緊張してきた。

こんな精神状態で、ミカツチさんほどの腕前の人を前にしてるなんて、正気でいられないかもしれ

ない。いっその事、気を失ってしまいたくなる。その方が断然楽だからな。

キヨカは、よくこんな空気で立ってられるな。

しかし、そんな緊張は長く続かなかった。

「充分、拝見させて頂きました」

その声と同時に、キヨカの喉元にミカツチさんの竹刀が突きつけられた。

「……………」

声が出なかった。それどころか、時間が止まってしまったみたいだ。

「……………参りました」

キヨカが絞り出すように出したそのか細い声で、ようやく俺の時間が動き出した。

「しよ、勝負あり。そこまで」

本当に一瞬だった。

ミカツチさんの動きが見えなかった。

一瞬で間合いを詰め、それと同時に竹刀が動いていた。

これがミカツチさんの実力か……。

だけど、そんなミカツチさんに、ここまでついていったキヨカはすごい。

「疲れたよ～」

キヨカは、へなへなと道場に座り込んだ。

「お疲れ」

歩み寄って褒めてやりたくなる。と同時に、自然と拍手をしていた。

「ファイ……。なんだか恥ずかしいよ」

「でも、シータは頑張っただろ。本当にすごかったぞ」

「……もう、いっぱいいっぱいだったよ」

「いやいや、あれだけでできれば、充分だろ」

「そうかな……。まあ、ファイがそう言うなら」

「シータさんは、本当に手強かったですよ。なかなか隙がありませんでした」

ミカツチさんも声を掛けてくれる。

「ミカツチさんがそんな風に言ってくれるなんて……。だったら、本当なんだね」

俺の言葉は信じられないのか……と言いたいところだが、俺もミカツチさんに言われれば納得できるよな。

「それでは、続いてファイさんですね」

「でも、連戦になるんじゃない……」

いくらなんでも、休憩なしの連戦はどうだろう。俺としては有利だけど、できれば万全のミカツチさんと対峙したい。

「わたしでしたら大丈夫ですよ。ファイさんを落胆させないつもりです」

「それでしたら……」

正直なところ、一刻も早く手合わせしたくてうずうずしてたからな。

「ファイ、頑張ってね」

キヨカはゆっくりと移動していく。足元がおぼつかないようだ。

俺は竹刀を手に、ミカツチさんと向かい合う。

先端を合わせる。

いよいよだ。

いくつも手を考えるが、全然まとまらない。

なるようになるしかないか。

考えすぎても意味はない。

体が動くように、それに任せていこう。

「ファイ、準備はいい？」

「ああ」

「ミカツチさんはいいですか？」

「いつでも大丈夫です」

ごくりと唾を飲み込む。

足が震えてくる。

真っ直ぐ前を見ると、ミカツチさんの仮面から目が見える。それが怖い。視線で刺されそうだと。

「それでは————始めっ！」

キヨカの声と同時に、一歩踏み出す。

キヨカの戦術と同じだ。

ミカツチさんは思った通りに反応し、一歩下がる。だけど、俺はそれを見越して、端(はな)からその

先を狙っていた。

これで決められるか。

勝ちたいという気持ちもあるけど、できるだけ長い間竹刀を交えていたいという気持ちがある。そ

れでも、勝つためには一気に攻めるしかない。この矛盾がもどかしい。

決まったかに思えた俺の剣戟(けんげき)だったが、ミカツチさんはそれを難なく受け流した。そ

し
て、そのまま反撃してくる。

「くっ」

攻めるのを中断し、一度下がる。下がれば勝機がなくなる。それがわかっている、ここで終

わら
せてしまうわけにはいかない。

なんとか体勢を立て直そうとしたが、ミカツチさんは追い打ちをかけてくる。

キヨカの時は、様子見をしていたミカツチさんだが、俺の時は積極的に攻めてきている。

「ファイさん、全部受けきって下さいね」

そんな事を言いながら、容赦なく打ち込んでくる。竹刀の乾いた音が響く。

俺は、それを受けただけで精一杯だ。反撃する余裕なんかない。一瞬でも気を抜けば、受け損

ねて
しまう。

ミカツチさんが、丁寧に打ち込んでくれているので、まだ受けやすい。

こりゃ、俺の実力を試されるよな。

絶対に、全部受けきってやる。

そう思っても、実際にそれが簡単にできるわけじゃない。気が抜けない。

距離をとるのは、逃げるみたいでイヤだよな。

できれば、こっちからも攻めたいんだけどな……。なかなかそうさせてくれない。

必死で受けていると、徐々に後ずさっている事に気付いた。

やばい。打ち負けてきている。

気付かないうちに、結構下がってきている。

「くっ」

受けつつ、押し返したいとこだけど、そんな余裕がないんだって。

「ファイ、頑張っ！」

キヨカの応援が力を与えてくれるけど、それでもミカツチさんに勝てない。

ちょっとは強くなったと思ったんだけどな……。ミカツチさん相手だと、この程度なのか。

「ファイさん、もう少し強く打ち込みますね」

「なっ」

言われた瞬間、剣戟が重くなった。

マジでまだ強くなるのか。

じりじりと後退していく。

おいおい、ミカツチさんの本気ってどんなだよ。まだ本気じゃないってのか？

竹刀でこの重さだろ。木刀や、まして真剣だったら……。受けきれぬ重さじゃないぞ。竹刀で
よか

った……。

「くっ」

なんて、そんな事を考えてる余裕はない。このままだと、道場の壁まで追い詰められそうだ。なんとか反撃のチャンスを……って、そんなの無いって。

「速く打ち込みます」

「げっ」

冗談だろ？

でも、それが冗談じゃないんだよな。

重さは変わらず、打ち込みが速くなっていく。

こりゃ、完全に受けきれない。

向きを変えられたら、完全に打ち込まれる。こうなってくると、ただの反射だ。考えて受けるなん

て無理だ。

速すぎる。

これは無理。

「ファイ、いいとこなしだよ」

わかってるっての。

最初から打ち続けられてるだけだもんな。

それでもなんとか、ミカツチさんの打ち込みを受け続ける。自分でもすごいと思えるね、これ

。けど、そろそろ限界だ。

どのくらい経ったかわからないけど、まだそんなに経ってないはずだ。なのに、腕はもう痺れてし

まって、思うように動かない。

普段ならあり得ないのに、もう握力がなくなっている。

なおも続くミカツチさんの打ち込みが、残されたわずかな握力を奪っていく。

「ここまでですか」

ミカツチさんの声に思考が止まる。

もしかして俺、見限られてしまったのか？ この程度だって、そう思われたのか？

握力がなくなっていた事に加えて、余計な事を考えたせいもあつただろう、俺の手から竹刀は

消えていた。そして、目の前には、ミカツチさんの竹刀の先があった。

終わった……。

負けた……。

そう理解した瞬間、床に竹刀が落ちる音が道場に響いた。

「そんな……」

全身から力が抜けて、膝から崩れていく。

完敗だ。

なにもできなかった。

打ち返す事なく、ただひたすら受け続けて、そして受け止めきれなかった。

「ファイ、すごかったよ」

キヨカがそう言って駆け寄ってくる。

「本当にすごかったんだから」

ぽんぽんと俺の頭に手を置かれる。それを振り払う気力はなかった。

「素晴らしかったです」

ミカツチさんもそう言ってくれている。

だけど、俺はなにもできなかった。それは事実だ。

「あれほど、わたしの剣戟を受け続ける事が出来るとは、思っておりませんでした。わたしの想像以

上に、強くなられている様ですね」

「でも、俺……」

俺はなにもできなかった。

キヨカもミカツチさんもそう言ってくれるけど、俺はなにもできなかったんだ。

「ファイさんは、なにも出来なかったと思っておられるのですか？ でしたら、それは間違いです」

間違い？

「だけど、実際、俺は……」

「ファイさんは、わたしの剣戟を受け続ける事が出来ました。それは、ファイさんが強くなられた証

拠です」

「それが……？」

どういう事だ？ 俺はただ受けるしかできなかったんだぞ。

「そうだよ、ファイ。すごかったんだから。私じゃ、あんなの一撃で負けてるよ」

「えっ……？」

どういう事だ？

「……やっぱり、ファイって自分のすごさに気付いてないんだね。まあ、自分じゃわからないの

かな

」

「なあ、シータ。どういう事だ？」

さっぱりわからない。

俺のすごさ？

「そうだよ。すごかったんだよ。ミカツチさんの竹刀の動き、目で追うのがやっとだったもん」

「えっ……？」

目で追うのがやっと？

キヨカは、それなりに動体視力がいいはずだ。そのキヨカが、追うのがやっとな？
「未経験者では、竹刀の動きを追えなかったでしょう。わたしは、そのつもりで打ち込み続けました」

そんな……。

だって、俺はミカツチさんの動きは見えていた。最後の方は、追うのがやっとなだったけど、それまではきちんと判断して対処していた。だから、普通の剣戟だと思っていた。普通よりは重かったけど。

「ですので、あれだけ受け続ける事が出来たという事は、ファイさんは大変強くなられているという事です」

「でも、俺は……」

「シータさんに対しては、攻撃を見極めさせて頂きました。そして、ファイさんに対しては、竹刀捌きを見極めさせて頂きました。あれだけを全て受けきる事が出来る者は、そうはおりません。わたしが知る限りは、わたしの師だけです」

「ミカツチさんの師匠……」

俺って、そんな人しか出来なかった事をやったのか？

「どうやら、実感はない様ですね。でしたら、休憩をとってから、再び竹刀を交えましょう。今度は、ファイさんが攻めて下さい。わたしは、受ける事だけを行います」

「うわあ、いいなあ……。私ももう一回やりたいよ」

「そうですね。シータさんとも、もう一度行いましょう」

「やったあっ」

キヨカは飛び跳ねて喜んでいました。

「……………」

俺は強くなってるのか？

自分の両手を見る。

二人はそう言ってくれている。だけど、俺自身は実感が無い。なにも変わっていないんじゃないか、そう思えてしょうがない。

「もう……。いつまでそうやってんの？ そうだ。お腹空いてるんじゃないの？ なにか食べたら、きっと元気になるよ」

なにか作ってくるね、と言って、キヨカは道場を出ていった。

「ファイさん。自信をお持ち下さい。わたしでは不足でしょうが、わたしが保証致します」

「……………ありがとうございます」

ミカツチさんに認められたのに、素直に喜べないのはどうしてだろう。やっぱり、俺はなにもし

できなかったからだろう。

受け続けるだけでした。すごかった。そうなのかもしれない。だけど、やっぱり打ち返したかった。

それ

は高望みなのか？

確かにミカツチさんは強い。俺なんかじゃ敵うはずもない。だけど、それでも一矢報いたか

つた。

これから反撃だ。

うじうじ考えるのはやめよう。

もう一度、ミカツチさんとやれるんだ。

だったら、そこで俺が打ち勝てばいい。ミカツチさんの防御を崩して、俺の成長を示せばいい

。

「よしっ」

気持ちを切り替えるんだ。

ゆっくりと立ち上がり、道場に転がったままの竹刀を拾う。

「ミカツチさん、今度は俺が勝ちますから」

「……はい」

俺の言葉に、ミカツチさんは笑顔で頷いた。

キヨカが作ってくれたおにぎりを食べると、力が戻ってきた気がする。

よし。これなら勝てるかもしれない。

……まあ、気のせいなんだろうけど。それでも、自分にそう言い聞かせれば、叶うかもしれない。

「お願いします」

「宜しくお願い致します」

道場の真ん中で、ミカツチさんと向かい合い、挨拶をする。

「ファイ、ミカツチさん、準備はいい？」

「ああ。いつでもいいぞ」

「問題ありません」

俺たちは竹刀の先を合わせる。

「じゃあ、始めっ！」

キヨカの声と同時に、俺は後方に跳ぶ。

「あれ？」

予想外の行動に、キヨカは首を傾げている。それは、ミカツチさんも同じみたいだ。

きっと、俺が合図とともに打ち込むと思っていたんだろう。だけど、俺は距離をとった。

「ファイさん。わたしは受けに徹しますので、どうぞ打ち込んできて下さい」

「はい、わかってます」

そんなのわかってるさ。

俺はミカツチさんに打ち勝つて決めてるんだからな。

だからそのために、こうしてタイミングを見計らってるんだ。

ミカツチさんに勝つためには、がむしゃらに打ち込んで無理だ。きちんと剣戟を組み立てないと

。その上で、チャンスを待つんだ。

だから、今はこうして様子を見る。

じりじりとミカツチさんの様子を見つつ、打ち込むチャンスを窺う。

やっぱり、チャンスなんかはないな……。

ミカツチさんには、隙らしいものは全くない。どこに打ち込んで、受け止められてしまうだろう

。その防御を突破できるチャンスを待つんだ。……って、そんなのなさそうだけどな。

だったら、作ればいい。

打ち込んで打ち込んで、少しでもミカツチさんの体勢を崩せればチャンスはある。

だけど、そのチャンスを作る打ち込みの組み立てが難しいんだよな……。結局、堂々巡りか。

隙を作るために打ち込むにも、打ち込む隙がない。

どうすりゃいいんだって感じだな。

こうなったら、がむしゃらに打ち込むしかないのか。

「ファイさん、いつでもどうぞ」

痺れを切らしているわけじゃないんだよな。単純に、俺が打ち込むのを待ってけている。

そりゃ、向こうからしたら、俺の強さの確認なんだけど、俺としてはそれだけで終わらせたくない

。試合形式であるからには、勝ちたいに決まってる。

キヨカはじっと俺を見ている。

「がんばれ、」

俺の視線を感じたのか、口がそう動いた気がした。

「しょうがないな。……ミカツチさん、いきます」

「はい」

真っ向勝負だ。

やってやる。

距離を一気に縮め、正面から打ち込む。

……と見せかけて、直前で竹刀を横に向ける。

ミカツチさんの竹刀は、正面からの打ち込みを受け止める体勢だ。

これなら入る。

そう思った瞬間、ミカツチさんの竹刀が降下してきた。

「えっ？」

なにかの冗談かと思えた。

竹刀と竹刀がぶつかる乾いた音がする。

俺はミカツチさんに打ち込んだまま動けない。

「そんな……」

目の前の光景が信じられなかった。

ミカツチさんは、竹刀の切っ先を持っている。どうやら、ミカツチさんは竹刀を離し、落下させた

状態で先端を持ち、俺の打ち込みを受けたという事か。

そんな事が可能なのか？ だけど、実際目の前にそれがある。

「……俺の負けです」

こんな人に勝てそうもない。

俺としては、最高の奇策だった。それを、その上をいく奇策で受けられ、完全に戦意を喪失してし

まった。

これ以上の攻撃は、俺にはできそうにない。

「いえ、竹刀だからこの様に出来ただけです。これが真剣であれば、もしくはファイさんが剣戟を続

けていれば、わたしは完全に負けていました。想像も出来なかった剣戟でした」

その言葉だけが救いだろう。

「それでも、俺には勝てる想像ができません。やっぱり、ミカツチさんは強いですね」

「ファイさんこそ、お強くなっていますよ。この短期間で、ここまで実力を上げるとは、わたしも想

像しておりませんでした。ファイさんの秘められた力には感服させられます。さすが、伝説の四刀(

しとう)に選ばれるだけがありますね」

「ありがとうございます」

ミカツチさんには勝てなかったけど、少しは強くなったんだよな。

「ファイ、すごかったよ……」

キヨカが駆け寄ってくる。

「本当にあの一撃はすごかった。ファイは強くなったよ」

「サンキュな。だけど、シータだって、かなり強くなっただろ」

「でもでも、ファイの方がすごいよ。これなら、アーちゃんよりも活躍できるよ」

「……だといいいけどな」

少しでも蜘蛛(アラネーオ)の力になりたい。これで、少くくは役に立てるだろう。

「一度、外で風伯(ふうはく)を振ってみますか？」

ミカヅチさんの提案で、俺は風伯を振ってみる事にした。

周囲になにもない荒野なのが、今ほど好都合だと思った事はないだろうな。

なにも見えない方向を見据え、風伯の風を感じる。

風伯。その力を全部引き出してくれ。

その気持ちに应じるように、風伯の風が今までに感じた事のない大きさになっていく。

「ちょ、これは強すぎないか？」

いくらなんでも、強すぎるのも考えものだな。こういう場所なら問題ないけど、街中なら絶対に無理だ。

だけど、今は問題ない。

全力全開で放ってやる。

「うおおおおおっ！」

風伯を空に向かって振る。その風を全て放つ。

「きゃあっ」

「……………」

キヨカとミカヅチさんは、風伯の風に後ずさる。俺も吹き飛ばされないように踏ん張るのが精一杯だ。

風は轟音とともに、空を切り裂き、雲を散らしていく。

「……………」

すっげえ……。

想像以上の力の大きさに言葉を失った。まさかこれほどとは……。

「す、すごいよ。すごいよ、ファイ」

「……素晴らしい力です。これが風伯の力……。伝説の四刀の力……………」

ミカヅチさんも、想像以上の力だったのか、ぽかんと口を開けている。

なんだか、見返せたみたいで嬉しい。

もっとも、ミカヅチさんは認めてくれていたわけだし、見返す必要なんてないんだけど。

だけど、これで俺も実感できた。

ミカヅチさんには勝てなかったけど、俺は強くなっている。それは確認できた。

これだけの力があれば、この先も大丈夫なんじゃないか？

だとしたら、ミカヅチさんに鍛えてもらうのも、これで終わりなのか？

今の生活の終わりを感じ、淋しくなってきた。

この世界に長く留まるわけにはいかないんだってわかってるはずなのに、それでもこの生活を
終え

てしまう事が淋しくてしょうがない。

風伯を鞘に収め、道場に向けて歩を進める。

キヨカとミカツチさんも、道場に帰っていく。

「次は、私とミカツチさんだね」

キヨカが隣にやってきた。

「頑張れよ」

散々応援してもらったくせに、それしか言えなかった。

「うん、頑張る」

キヨカは拳を握る。

「でも、ファイとも試合してみたいな」

「えっ？」

俺と？

思わずキヨカの顔をまじまじと見てしまう。

俺なんかと試合をしてどうするんだ？

「私だって強くなったもん。それを、ちゃんとファイにわかってもらわないと」
なるほど。

「わかった。ミカツチさんとの後にでもするか」

「うん」

キヨカは満面の笑みを俺に向けてくる。そして、とてとてとミカツチさんの隣に走っていき、
今の

やり取りを報告している。

「わたしとしても、お二人の試合を見てみたいですね」

どうやら了承されたらしい。

キヨカとか……。

以前ならそういう気にすらならなかった。だけど、今は楽しみだ。キヨカと剣を交えてみたい

。

道場に戻り、キヨカとミカツチさんの試合が始まった。

キヨカは、最初から打ち込まず、様子を見ている。

それでも、積極的に打ち込んでいく。俺のように、じりじりと待ったりはしない。打ち込んで崩そ

うとしているようだ。

俺だって考えはしたが、実行できなかった作戦だ。

「頑張れ」

二人に向けて――まあ、主にキヨカに向けて声を掛ける。

キヨカの剣戟は、完全に見切られているのか、ミカツチさんは易々と受けている。

だからって、キヨカの剣戟が悪いわけじゃない。ミカツチさんには通用していないだけだ。

こんなに差があるのか。

自身が向かい合っていると、自分の力がわからない。だけど、こうして誰かの試合を見ていると、

ミカツチさんの実力はもちろん、キヨカの実力もよくわかる。

あの強さの相手に、あそこまでできるとなると、既にじいさん以上になってるんじゃないだろうか

。

旅から戻って、じいさんに試合を申し込むのが楽しみになってきた。

まさか、こんなに強くなってるとは思ってないだろうからな。

俺がそんな事を考えている間も、キヨカは打ち込み続けている。

休まず打ち込んでいるのはすごい。慣れのせいなのか、キヨカが純粋なのかはわからないけど、キ

ヨカの剣戟はどこか単調だ。様々な方向からなんだけど、規則性があるというか……こりゃミカツチ

さん相手じゃなくても、早い段階で見切られてしまうだろうな。

どうしても素振りの練習だと、自分のリズムみたいなものがあるからな。それで、流れを体が覚え

てしまって、試合もその動きをついしてしまう。反射みたいなものだ。

そのせいで、どうしても相手に動きを読まれやすくなってしまう。

今のキヨカは、まさにその状態だ。

本来なら、ミカツチさんの一撃がすんなり決まっているところだ。ミカツチさんが、キヨカを見極

めてくれているから、今のようになっているだけだ。

俺が相手だったら……。

どうするんだろうな。

一発で終わらせる事も可能だ。

だけど、キヨカがどれだけ強くなったのか、それを見極めたいという気持ちもある。

小さい頃は、一緒にじいさんに鍛えられてたわけだからな。そんなキヨカの成長を見たい気持ちはある。

ミカツチさんのように、巧く受ける事ができるかわからないけど。それはやっぱり、ミカツチさんとの差なんだろうな。

それにしても、見応えはある。そして、学ぶべき事もある。

ひたすら打ち込んでいるだけだが、それを続ける事は並大抵の事じゃない。

すげえ。すげえよ、キヨカ。

そんな試合も、キヨカのスタミナ切れで幕を下ろした。握力がなくなったのか、キヨカの竹刀が床に落ちた。

「そこまでっ！」

試合の終了を告げる。終わりは意外と呆気ないものだった。だけど、そこまでの過程がすごかった。

「疲れたよ〜」

キヨカの間を抜けた声を聞くと、さっきまでとは別人みたいだ。こんなヤツが、あんな風に竹刀を振ってたんだよな。まるで二重人格だ。

「お疲れ様です」

結局、ミカツチさんには到底及ばなかったものの、キヨカは確実に強くなっている。

戦法が剣術寄りだけど、剣道の試合ならインターハイ優勝も夢じゃないんじゃないだろうか。もっとも、時期的にもう出場はできないんだけど。留年すれば大丈夫なのか。いやいや、そこまで出場する必要はないだろ。そんな事をすれば、話題になりすぎる気もするし。もとより、キヨカにその気がないだろう。

「疲れたけど、すごく強くなった気がするよ。インターハイ目指そうかな」

その気があったらしい。

「やめとけてっ」

「どうしてよ」

かなりやる気らしく、否定すると膨れっ面を見せる。

はあ〜、とため息を吐いて、

「あのなあ、今の実力で出場したら、変に話題になるぞ」

「そうだね、一躍時の人だね。いいじゃない。ファイもさ、大学剣道ってないの？」

「知らん。っていうか、その実力でだと洒落にならないと思うぞ」

もっとも、俺たちがしてたのは、剣道っていうよりも剣術なんだろうけどな。剣道のルールだと、

反則になるような事ばかりだ。もしかしたら、ルールに縛られて、意外と普通の試合になるかも。

いやいや、やっぱり無理だ。

「本気だもん」

「そうか……。けどな、出場は無理だ」

「ファイって意地悪だよ」

「意地悪で言ってるんじゃないっての。お前、今年卒業だろ。普通なら、引退してる時期じゃないのか？」

旅に出たのが八月。部活によっては、その時点で三年生は引退している場合もある。しかも、そこ

から数ヶ月――正確にわからないのがつらいけど――経っている。だとしたら、今頃冬なんじゃない

だろうか。

そうなれば、ほとんどの部活は引退している。

「……………そっか。そうだよな。インターハイ出場しようと思ったら、もう一年早くなかったらダメ

だったんだね」

キヨカはその事実を知り、しょんぼりと肩を落とす。

「でも、留年すればいいのか。どうせ、出席日数足りないだろうし」

「……………」

どうやら、留年に抵抗はないらしい。それは問題だと思うんだがな。

だけど、それが現実味を帯びてるんだよな。なにせ、三分の一は欠席してるだろうからな。この旅

が長引けば、年度をまたぐかもしれないんだし。

最近、そういう事をすっかり忘れていた。だけど、いまさらどうこうしても遅い。その辺は、なる

ようにしかならないだろう。

「そんな冗談は別にいいんだよ。私だって、珍獣扱いされるのは本意じゃないもん。そりゃ、美少女

剣士現る！ とか、そういうのはいいけどね」

「なんだ、それ」

美少女剣士？ 美少女……。

「ファイ、なにか言いたそうだね」

「な、なにがだ？」

ギロっと睨まれる。

「なにか言いたい事があるなら、ちゃんと聞くよ。だから、正直に言ってよね」

「だから、なにもないって」

禁句だ。今俺は、なにも言ってはいけない気がする。

「本当？ なにか、私の主張に引っかかってない？」

「お前、なにか言わせたいのか？」

「そういうつもりはないよ。ファイがなにか言いたそうにしてる風に見えただけだよ。だいたい、フ

アイはすぐ顔に出るから、隠せるなんて思わない方がいいよ」

「……だから、なんでもないっての」

動揺を隠そうとすればするほど、怪しくなってくるのはわかっている。なのに、動揺は隠せない。

「まあ、照れ隠しなのはわかるけどね。それでも、失礼だと思うんだよね」

「だから、なんでもないって」

「いいよ。……それよりも、ミカツチさん、私どうでした？」

キヨカは俺はどうでもよくなったらしく、ミカツチさんの所に走っていく。

今までの態度が一変してしまう。変わり身の早さには驚くしかない。

「ふう～」

なんだか妙に疲れた。

なににせよ、本当に強くなったよな。俺なんかいなくても、一人でなんとかできるんじゃないかっ

て思えてくる。

……だからこそ、俺はもっと強くなれないと。

蜘蛛(アラネーオ)と一緒に戦えるように、場合によっては、一人で蟲(ベステート)と戦えるように
ならないとな。

その提案は翌日だった。

「お二人とも、充分強くなられたと思います。今でしたら、旅の目的も果たせるかと思いますよ」

朝食を食べ終わった時、ミカツチさんがそんな事を口にした。

その言葉に、俺たちは言葉を失い、互いの顔――仮面か――を見た。

「俺たち、旅をしてるって、そんな話しましたっけ？」

この国では、この国以外での事を話す事はない。だから、俺たちがそんな話をした記憶はない

。

「あ、いえ、その様な気がただけです。誤りや失礼がありましたら申し訳ありません」
ミカツチさんが、今まで見せた事のない動揺をしている。

なにがきっかけだったんだろう？ いくらミカツチさんでも、なにもないところから、そんな想像

をするとは思えない。なにかのきっかけがあったはずだ。

それを考え出すと、今まで気が付かなかった引っかけりに気付いてしまう。

伝説の四刀——風伯。

この刀は、どう考えても普通じゃない。

どんな世界でも、風を放つ刀なんてないだろう。この世界にもないはずだ。そんなのは、ファンタ

ジーの世界くらいだ。

なのに、ミカツチさんは、風伯をすんなりと受け入れていた。むしろ、風伯の特性を知っていた節

すらある。

どういう事だ？

色々と訊きたい。

どうして風伯の能力を受け入れる事ができたのか。

そういえば、俺たちは風伯の名前を言ったけど、これが伝説の四刀であるとは言っていない。

それ

なのに、ミカツチさんは……。

うっわあ。

思い出していけば、いくらでも訊きたい事が出てくる。

だけど、それを訊けば、俺もミカツチさんも、この国を出ないといけなくなってしまう。

俺たちだけならまだしも、ミカツチさんを巻き込むわけにはいかない。

だけど、伝説の四刀の事を知ってるって事は、俺たちと少なからず関係があるって事だ。

違う時間なのかはわからない。だけど、あの村に——そして、神様にもなにか関係があるはずだ。

「ねえ、ファイ。ミカツチさんって……」

キヨカが小声で話し掛けてくる。

おそらく、キヨカも同じように考えてるんだろう。

「シータ、それを確認する事はできないんだぞ」

「わかってるよ」

確認できないもどかしさ。

別に正体を暴きたいわけじゃないのに。ただ、仲間だって事の確認だけなのに。

それすらもできないこの国の決まりがもどかしい。どうして、こんな決まりがあるんだよ。同意が

あればいいじゃないか。

そう思っても、やっぱりこの国の成り立ちを考えると無理だろうな。

「申し訳ありません。心を乱すつもりはなかったのです。心より、お詫び申し上げます」

ミカツチさんは床に手を突き、深々と頭を下げる。

「ミカツチさん、やめてください」

「私たちは別に……」

「いえ、お二人の心を惑わしてしまいました。本当でしたら、全てをお話ししたいのですが、

わたしには、この国以外に居場所が御座いません。勝手では御座いますが、ご容赦頂けますでしょう

か」

全てを聞きたい。その気持ちは変わらない。だけど、それで不幸になる人がいるなら、いくら相手

が話したくても聞くわけにはいかない。

「わかりました。俺たちはなにも聞きませんでした。今、食べ終わったばかりです」

「そうですよ。今日もご飯が美味しかったね」

よし、いいぞ。

「ですが、わたしは……」

ミカツチさんは、結構責任を感じてるみたいだな。

「さて、今日はどうしようかな。なあ、シータ。今日は手合わせしてくれないか」

「うん、そうだね。やっぱり、実戦形式だと燃えるよね」

なんとしても、さっきの話をなかった事にしよう。

……だけど、確かにいつまでも、ここでこうしているわけにもいかないんだよな。

俺たちは目的があって旅をしている。その目的を果たしていかなければならない。

居心地がよすぎて、ついいつまでもここにいたくなる。こうして、三人で過ごしていたくなる

。

だけど、俺たちは蟲(ベステート)を封印しなければならない。

そういや、あれから蟲(ベステート)は出現してないんだろうか。ここにいる間は、そういう話を聞

かなかったが、以前の場所からはかなり離れてるからな……。もしかしたら、あの街は壊滅して

とか……。いやいや、さすがにそうなれば、なんらかの情報があるだろう。あそこじゃなくても、ど

こかで出現していれば、なにかしらの噂くらいあるんじゃないか。それが無いって事は、きっと平和

なんだろう。便りが無いのは……って言うしな。

「さてと、片付いたら道場に行こうぜ」

「うん」

今の生活の終わりを感じながら、俺たちは一日、竹刀を振っていた。

「ねえ、ファイ」

「ん？」

夕食の後、ミカツチさんがいなくなったのを確認して、キヨカが話し掛けてきた。

「ミカツチさんって、蟲(ベステート)とかそういうの、知ってるんじゃないかな」

「おい、シータ」

それは言っちゃいけないだろ。

「だって、ヒナゲシさんとリュウドウさんがいるじゃない」

「そうだけど……」

確かに、俺たちは他の時代の蟲(ベステート)を倒して旅をしている人たちに会っている。だから

、
他にたって不思議じゃないと思う。

だからって、すぐにそれと結びつけるのはどうなんだろう。それは短絡すぎるだろ。

そう思っても、考えてしまうのは俺も同じだ。

もしかしたら、ミカツチさんは、俺たちからして過去なのか未来なのかはわからないけど、同じ目的の人なんじゃないだろうか。

だけど、そうだとしたら、一人だというのはどういう事なんだろう。

この旅は、必ず男女ペアじゃないといけないらしい。だとすれば、ミカツチさんのパートナーは？

「……………っ！」

いけない考えをしてしまった。それは考えないようにしよう。考えたくもない。

「そういえばね、ミカツチさんって、ずっと右腕に包帯巻いてたの気付いてた？」

「包帯？」

そういえば、巻いてたかもしれない。あまり注意して見てなかったからな。っていうか、凝視しよ

うものなら、キヨカがお怒りモードになるからな。

「まあ、服を着てたらわからないかもだけど。前にね、一緒にお風呂に入った時、怪我してるのかな

……と思って訊いたんだけど、怪我じゃないって言ってたんだ」

そう言って、キヨカは自分の左手を見る。白いオープンフィンガーグローブは、包帯に見えない事

もない。

そんな事を考えていると、どんどん思考がそっちにいつてしまう。

いくらなんでも、それはない……………とは言い切れないか。可能性ならいくらでもある。考え

出す

とキリがない。

「とにかく関係者かもしれないけど、俺たちは質問できないだろ」

「わかってるよ。わかってるから余計にさ……」

「俺も同じだよ。……でもさ、仮にそうだったとしても、俺たちにはどうする事も……」

「でもさ、一緒に戦ってくれるかもしれないじゃない。ミカツチさんが一緒だったら、とっても心強

いよ」

「そりゃ、俺だと……」

「違うよ。わかってるくせに、そういうの言うの？」

「すまん」

「いいよ、別に。やっぱりさ、ファイが危険だと心配なんだよ」

「……………すまん」

「謝る事じゃないよ。しょうがないもん。わかってる事だけどさ」

「ああ」

「でもさ、ファイも私も強くなったもんね。これなら、アーちゃんだって、封印しやすくなるよね」

「だといいけどな」

ミカツチさんの正体がなんにせよ、俺たちはすべき事をすればいいんだ。ただそれだけだ。

「今日も疲れたし、とっとと寝ようぜ」

「そうだね。明日も、いっぱい修行だよ」

「ああ、そうだな」

明日か……。

そんな毎日は、いつまで続くんだろうな。いつまで続けていいんだろうな。

心の歌を奏でて 一仮面の国一 ㊥の㊤

<http://p.booklog.jp/book/102213>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102213>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102213>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ